

わたしのいばしよ みんなのいばしよ

～とくしま子どもの居場所づくり～



● わたしのいばしょ ● ● みんなのいばしょ ●

県内の子ども居場所・支援者

ぎんざ和囲和囲(子どもmooおとなmooWiwi食堂)	4
いきいき安心移動子ども食堂 徳島子ども食堂ネットワーク	6
Tsuda Machi Kitchen つだまちキッチン	8
特定非営利活動法人 子育て支援ネットワークとくしま	10
鴨島児童館	12
上八万児童館	14
NARUTO総合型スポーツクラブ 子育て応援隊！キッズステーションNARUTO	16
一般社団法人 ひとみ学舎	18
外遊び場 さつちやんち よここ	20
特定非営利活動法人はばたき 児童自立援助ホーム ゆめ	22
地域における子どもの居場所を考える座談会	24
鳴門教育大学子ども未来応援プロジェクトの 大学生や大学院生が考えてみた！	30
東みよし町社協の取り組み	32
「子どもの居場所」づくりの推進に向けた取り組みについて	32
令和2年度「とくしま子どもの居場所づくり推進基金」交付団体一覧	34
とくしま子どもの居場所づくり推進基金交付団体の紹介	36
こどもつとからふる	36
社会福祉法人 共生会	36
ユニバーサルカフェ「きららカフェ」	37
料理学習 つむぎ	37
友愛クラブ「ともしび」	37
ユニバーサルカフェ「コミュニティはうすTSUDDOI」	38
子どもの居場所応援機関・団体	38
徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドライン	40



はじめに

子どもは、社会を映す鏡である。日本経済の不況や先の見えづらい社会情勢は、子どもたちが育つ環境として非常に厳しい状況といえます。天災や事故、事件のニュースを目にすることも多い現代では、安心して安全な子どもの居場所に、大人の存在が欠かせなくなっています。学校の終わる放課後、公園や路地裏で小学生が遊ぶ楽しそうな姿を見ることは、少なくなりました。子どもたちだけで自由に遊ぶことができた時代は、過去のものとなりつつあります。市町村や県の事業の一環として実施されている居場所はもちろん、地域の中に、子どもの豊かな育ちを願って運営される居場所が多く存在することが、子どもたちの、そして私たちの明るい未来に繋がります。

徳島県では、令和元年5月29日に、徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドラインを策定し、県内の各地域で展開されている「子どもの居場所」づくりを更に広げ、県民関係団体、県及び市町村が連携・協力し、持続可能な運営としていく仕組みづくりに取り組んでいます。この冊子は、このガイドラインに基づき、子どもの豊かな育ちを地域で見守る「子どもの居場所」づくりを推進していく目的で作成しました。

この冊子では、県内にある「子どもの居場所」や「子どもの居場所」を支える人々を紹介しています。「今日も楽しかったな」「この地域に生まれ育ってよかったな」と子どもたちが自然に感じることで、地域の誰もがほっとできる、「つながる場」「見守る場」「支えあう場」となっている「子どもの居場所」が、この冊子を手にした方から広がっていくことを願っています。



「子どもの居場所」って どんなところ？

「居場所のない子どもたち」、「貧困の中にある子どもたち」と聞いて、皆さんはどのようなイメージを持たれるでしょうか。教室の中の7人に1人の子どもが貧困―「見えない貧困」と言われるように、学校や地域の中でも周囲に気付かれず、十分な支援に繋がっていない子どもたちもいます。また昨今では放課後の過ごし方に困り、家の中で一人過ごす子どもも少なくありません。全ての子どもたちが明るい未来を信じ、自分の足で歩き出したいと思う気持ちを持つためには、多くの人に会い、たくさんさんの経験をし、様々な困難や課題を乗り越え、自分で自分の未来を切り拓いていく力を身につける必要があります。

「子どもの居場所」とは、「地域の大人との継続的な交流ができる、子どもたちにとって安全で安心な居場所であり、信頼関係のもとでの様々な活動を行う中で、すべての子どもたちが夢や希望をもって健やかに成長していける場である。原則として、18歳に満たないすべての子どもや家庭を、地域で見守る子どもたちの居場所である。」(徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドライン) (徳島県令和元年5月29日策定) です。「子どもの居場所

づくり」は、1990年代から重要視され、当初は少子化対策や子育て支援の一環として、また地域社会の希薄化といった問題意識から始まりました。近年は、そういった問題意識に加え、「子どもの貧困」対策としても重要視されるようになってきました。「子どもの貧困」とは生命の存続が脅かされるような飢餓状態にあること(「絶対的貧困」)だけでなく、子どもたちが成長し発達する上で必要な資源が十分でない状態(「相対的貧困」)のことを指しています。物質的な不足や経済的な困難に加え、経験や人との関わり不足の足りなさについても「貧困」と表現します。

「子どもの貧困」や「子どもの居場所づくり」に注目が集まった背景には、2015年の国連サミットにおいて、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」として、17のゴールが示されたことが関係しています。17のゴールの1番が「貧困をなくそう」です。また、「子どもの居場所づくり」がすべての子どもたちに、家庭や地域社会の中で安心安全に、そして健やかに過ごせる居場所を準備することを目指しているという点において、「3番」すべての人に健康と福祉を「や4番」質の高い教育をみんなに、「11番」住み続けられるまちづくりを、「17番」パートナーシップで目標を達成しよう」なども関連しています。日本においても、2015年より「子どもの未来応援国民運動」として、子どもの貧困対策や子どもの豊かな育ちと未来を保障する運動を広く展開しています。

SUSTAINABLE GOALS



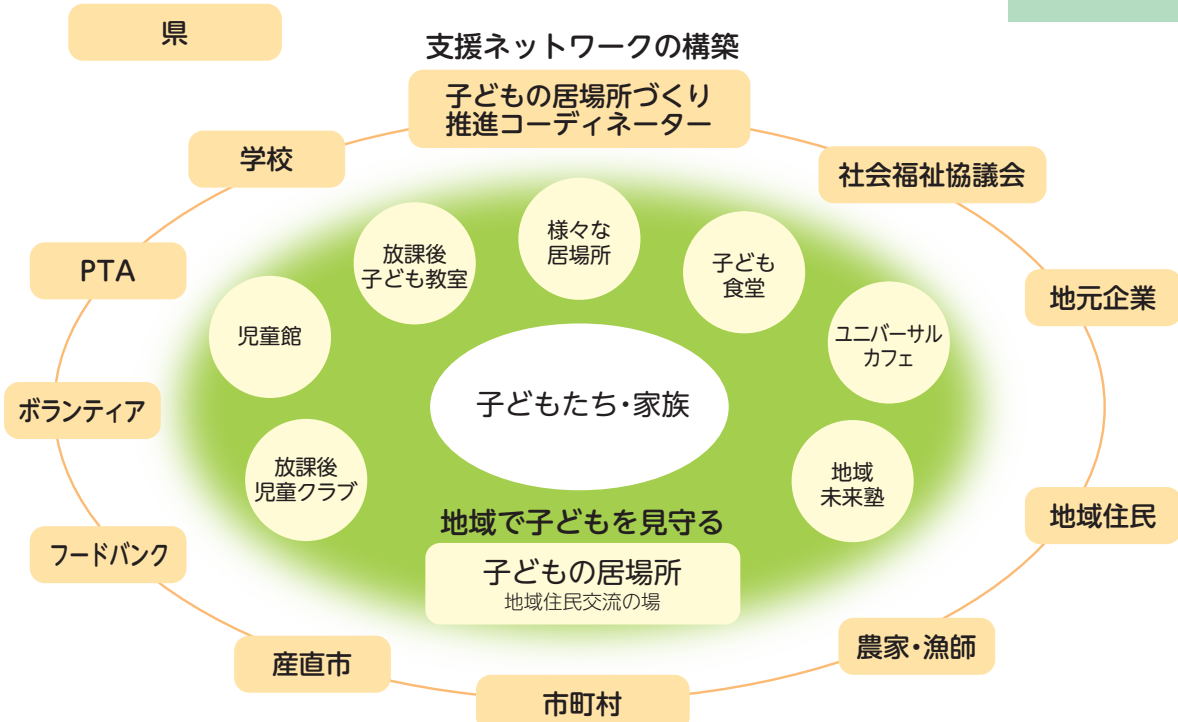
子どもの居場所づくりに関連する目標

徳島県における

「子どもの居場所」

徳島県内にある子どもの居場所には、福祉行政や教育行政の一環として設置されている子どもの居場所(例えば放課後児童クラブや児童館、放課後子ども教室、子育て支援拠点、地域未来塾、子どもの生活・学習支援事業など)や、民間主導で進められる子どもの居場所(子ども食堂・ユニバーサルカフェ・フリースクール・プレイパーク・子ども会・青少年活動団体など)、そのほかにも様々な居場所が存在しています。

広域的な支援バンクを設置



放課後児童クラブ(学童保育)

保護者が仕事などで、昼間家庭にいない子どもを対象に、放課後に小学校の余裕教室や児童館などを利用して生活や遊びの場所を提供し、子どもの健全な育成を行っています。

対象児童

小学生(利用するために登録が必要です)。

開所日

平日・夏休みなどの長期休暇など。

開所時間

下校時から午後6時頃(夏休みなどは、1日開所する場合があります)。

※開所日や開所時間は、クラブによって異なります。

問い合わせ

市町村の児童福祉担当もしくは各クラブ

引用

徳島県はぐくみ支援ポータルサイト「とくしまはぐくみネット」
<https://www.tokushima-hagukuninet/>

児童館

児童館は子どもたち(0歳〜18歳未満の児童)の「遊びの場」として県や市町村が設置しています。

特色は各児童館によって様々で、開館時間や施設の様子、設備や開催イベントなど児童館ごとに違います。広い庭やボール遊びができる遊戯室があったり、避難訓練や阿波踊り教室を行っている児童館もあります。

児童館では異なる年齢の子どもと一緒に遊ぶので、子どもたち自身の自主性・主体性・創造性・社会性などがはぐくまれます。

引用 徳島県はぐくみ支援ポータルサイト「とくしまはぐくみネット」
<https://www.tokushima-hagukuninet/>

放課後子ども教室

小学校の余裕教室等を活用して、地域の多様な方々の支援と協力を得て、子どもたちと共に学習やスポーツ・文化活動等の取り組みを行います。

具体的活動内容は各地域によって様々です。

引用 徳島県はぐくみ支援ポータルサイト「とくしまはぐくみネット」
<https://www.tokushima-hagukuninet/>

地域子育て支援拠点事業

公共施設や保育所、認定こども園、児童館、空き店舗等の地域の身近な場所で、乳幼児のいる子育て中の親子の交流や育児相談、情報提供等を実施する事業です。

引用 徳島県はぐくみ支援ポータルサイト「とくしまはぐくみネット」
<https://www.tokushima-hagukuninet/>

子ども食堂

「子ども食堂」は、「子どもたちに無料または低価格で食事を提供し、子ども一人でも入れる食堂」であり、地域の多世代交流拠点といわれています。

引用 徳島県はぐくみ支援ポータルサイト「とくしまはぐくみネット」
<https://www.tokushima-hagukuninet/>

ユニバーサルカフェ

(徳島県版ユニバーサルカフェ認定制度)

徳島県では、子ども、高齢者、障がい者、外国人などが集う拠点のうち、一定の基準を満たした拠点を「ユニバーサルカフェ」として認定し県ホームページや地域情報紙への掲載を通じて、利用者の拡大さらには絆づくりを推進しています。

「ユニバーサルカフェ」は社会福祉法人やNPO法人等が運営しており、集まった全ての人がお互いに「支え」「支えられる」関係性を構築できる

ように、趣向を凝らした取り組みを実施しています。

引用 徳島県ホームページ <https://www.pref.tokushima.lg.jp/>





ぎんざ和団和団 (こどもmoおとなmo Wi-Wi食堂)

みんな元気で賑やかに 寄り添い暮らす憩いの場

住吉さんの発案で2013年11月11日にオープンした『ぎんざ和団和団』。ちょっと立ち寄ってお茶を飲んだり、おしゃべりしたりできる賑やかさと人の温かみを感じられる交流の場です。

保育園児や小学生の子どもを中心に10人くらいを対象に子ども食堂を開催しています。63〜91歳のボランティアが調理や子ども向けワークショップのサポートを行っています。

より多くの方に知ってもらうため、市の子育て支援課や福祉課へ広報のお願いに行ったり、学校などにチラシやポスターの配布も行いました。

『ぎんざ和団和団』のメニューはいつもその日の材料次第。農家を営むボランティアさんがいて、新鮮な野菜を持ってきてくれるのだとか。他のメンバーも「一人では食べきれないから」といろいろな食材を持ち寄ります。ピーマンをたくさんもらったら、細く切って肉と炒めたり、豆



腐屋さんからおからをもらえば、おからを炊くという風に、ある物をフル活用して作ります。そうしてできるあがる温かい家庭料理はおいしいと好評です。

一人でごはんを食べるよりも、みんなと一緒に料理してわいわい言いたいという思いを込めて、『和団和団』という店名にしたという住吉さん。

コロナ禍では家族以外のみんな

一人暮らしの高齢者が孤立しないよう、2013年にスタートした集いの場『ぎんざ和団和団』。お食事処を兼ねたコミュニティスペースで、わいわい楽しく交流する中で「地域の子どもたちのために何かできることはないだろうか」と、ボランティアで毎月第4水曜に子ども食堂やワークショップなどを開催しています。

るため、外出自粛が推奨された2020年3月中旬から5月の連休までは店を閉めていました。その間、新しいハンカチや浴衣の生地などを持ち寄って、マスクを作っていたのだとか。生地を切る係、アイロン係、ミシンの係と作業分担し、10,000枚以上作っていつもお世話になっている人たちに寄付しました。

健康長寿のための『100歳体操』など、高齢者向けの企画も定期開催し、地域の高齢者にとっても憩いの場となっています。

商店街に子どもの居場所を 『子ども食堂』への挑戦

住吉さんが『子ども食堂』を始めようと思ったのは、テレビでNPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークの『子ども食堂』を見て、興味を持ったことがきっかけ



池田駅近くの商店街は、たくさんのお店もあって昔はすごく賑やかでしたが、過疎化が進み、後を継ぐ人がいないためお店は次々と閉店。高齢者の姿しか見かけなくなったことに、淋しさを感じていました。

テレビを見て、『こういうのをしてみたらどうだろう?』と思った

の、どっぴり風にしたらできるのか、学校へ聞きに行けば良いのか、ただごはんを作っただけではダメかな...と、悩んでいたら、徳島市沖浜の『ナガヤ』というところで、『子ども食堂』をやっている森さんが、『子ども食堂』をしたい人を集めた講習会『徳島子ども食堂を作ろうの会』を開いているのを新聞で知り、話を聞きに行きました。そこで森さんから『あんまり深く考えず、自分たちができることをしたら良い』とアドバイスをもらい、自分たちができることから始めようと思



いました。『子ども食堂』をしていて良かったと思うことは、知り合いがたくさんできたこと。野菜を提供していた

だいたり、調理担当の方など、関わってくださる方々に感謝しつつ、毎日違うメニューを考え、おいしく食べてもらえることが嬉しいとい

イベントがあると役場や商工会から声を掛けられることも増え、『四国酒まつり』や『フティング世界選手権2017』、『ツールドに阿波』などの地域のイベントにも積極的に参加し、あげパンや焼きそば、おでんなどの屋台を出して賑わいに花を添えています。

「大変だけど何かしている方が良いですね。メニューを考えて、材料を用意して...。集まってわいわい言いながらみんな何かしている時間が、元気の源だと思

子どもたちと いつか一緒に踊りたい

人に対してのいたわりや優しさを持ち、挨拶のできる子どもになっ

欲しいという思いで子どもたちと接している住吉さん。

『子ども食堂』を始めた当初から来ていた子どもは、今、高校生になり、中学生になると部活や塾が忙しく、自然と足が遠のくため、もっとたくさんの子どもたちに来てもらえる方法はないかと、いつも考えているとのこと。また、食事をするだけでなく、何か他の楽しみもあつた方が良く、ひな祭りや七夕など季節の行事にちなんだワークショップや工作教室なども行っています。

「100均ショップなどで材料を集めて、あれやろう、これやろうと考えるんですが、子どもたちの発想はその上をいくので、ワークショップでは子どもたちのセンスにびっくりしています。」

住吉さんがいつかやってみたくて思っていることのひとつが踊り。普段から婦人会のメンバーで歌謡曲や民謡などの踊りを習っているそう

で、敬老会などでも披露し、人気なんだとか。衣装も小物も髪も手作り



ボランティアの方々も歳をとってきているので、次の人材も考えていかないと続けていくのは難しいという不安はあるものの、住吉さんにとって『子ども食堂』は『毎月のはりあい』であり、『1年の元氣』の源であり、人への感謝で繋がる



ぎんざ和団和団(こどもmoおとなmo Wi-Wi食堂)

場所 三好市池田町マチ2175
電話 0883-72-2131
開催日 毎月第4水曜(12月第3水曜)
時間 16:30~19:00

【利用料金】
小中学生 100円
大人 500円
※ワークショップは季節に応じて趣向をこらした様々な工作などを行っています。材料費は100円。

すみよし ちえみ
●代表 住吉 千恵美さん



JR阿波池田駅近く、銀座通りに面した小さなお店『ぎんざ和団和団』の代表。若い頃、東京の料理学校に通っていた経験を活かし、野菜中心の温かい食事を提供する食堂を始めました。高齢者の孤立を防ぎ、誰もがいきいきと暮らせるよう、地域の人と協力し合い、多彩な活動を行っています。



いきいき安心移動子ども食堂 徳島子ども食堂ネットワーク

子どもたちに「食」と「職」の体験をどけるキッチンカー

徳島市内以外でも子ども食堂を開催できるよう、念願のキッチンカーを購入し、第4木曜を基本に徳島県内の学童保育を中心に活動しているという佐伯さん。本来であれば県内各地へ行く予定だったのですが、コロナ禍の今、12カ所くらいの決まった施設を回っているとい



ます（料金は子どもは無料、大人は3000円）。※コロナ禍では大人も無料。

キッチンカーで活動する子ども食堂は全国初。イベントなど単発でキッチンカーが走ることはあったのですが、キッチンカーを所有して活動している子ども食堂は徳島だけだそうです。

キッチンカーを購入したのは子どもたちに「食」の体験と「職」の体験をしてもらいたいという思いから。食の啓蒙も兼ねて、子どもたちと共に原価計算や調理体験など、地域との交流も兼ねた活動を企画されています。

キッチンカーではお好み焼きや焼きそば、焼きうどん、肉巻きおにぎりなどを作り、できたてを提供しています。夏場は鉄板の温度が300℃近くまで上がるため、熱中症になりかねない危険な暑さに、到底使用できないということが、キッチンカーを持って初めて分かったそうです。そのため夏の活動がしばらく、秋風が吹き始めてようやく活動を再開できたといいます。

全国の仲間からヒントをもらい、今、必要なことに取り組む

コロナ禍での自粛生活が始まり、子ども食堂ができなくなつた3月頃、県内各所の子ども食堂はフードパントリー（食品の無償提供）に切り替え、活動を継続しました。また、佐伯さんはそれとは別に「地域に子どもの居場所をグループ・わいわい」で、いち早く子ども向けの宅食サービスを開始しました。週1回、1カ月最低60〜80食をプロに頼んで調理してもらい配送する『子ども宅食』を思いつき、実行できたのは、普段からの意識付けがあったからといいます。

2年前から全国の子ども食堂の集会などへ足を運び、そこで知り合った仲間たちとお互いに連絡をとりあい、他の都道府県の動きや活動を参考にしているという佐伯さん。

2018年12月、子ども食堂を全国に広め、活動のすそ野を広げるための講演やシンポジウムを行う



「広がれ！子ども食堂の輪！」を徳島でも開催したことをきっかけに、NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえの代表理事の湯浅誠さんと交流が生まれ、活動のヒントをもらっているといいます。

子どもの味覚を育てるために良い食材を吟味する

佐伯さんにはお孫さんがいるのですが、子ども食堂で提供するのは「孫に食べさせたいと思うような体に良いもの」を出そうというも考えられています。焼きそばに使うキャベツ

も、オーガニックフェスタで日本一になったキャベツ農家さんをお願いし、機能的野菜と認められたキャベツを使っているのだとか。農家さんは佐伯さんの熱意に共感し、「お役に立てるなら」と無償で提供してくれているそうです。

「子どもって苦味を感じたりするんですけど吐き出すじゃないですか。でも、美味しいものだ、食べないとと思うようなものでも食べるんですよ。子どもにもちゃんとした味覚が備わっていて、それを育てるのが親や大人の役目。食材のすべてをオーガニック、機能的野菜にすることはできませんが、何かひとつでも良いと思うものや、孫に食べさせたいと思うものを使うようにしています。」



子ども食堂は、子どもたちができる限り自分を出せる、安らいで過ごせる場にしたいと思っています。で、聞く力を磨き、気になる所作などを感知する力が必要だと思っています。」

エシカルやフードロスへの関心の高まりが意識を変える

子ども食堂に関わるスタッフは、主にフードバンクを手伝いに来てくれる人ですが、子ども食堂に関心のある高校生や大学生もボランティアで関わっています。加えてチラシで子ども食堂を知



た人や、学習会などで知り合った人も手伝ってくれていて、エシカルやフードロスへの関心が高まるとともに、フードバンクや子ども食堂の活動も徐々に広まっているといいます。

「例えばパン100個の注文があったら、ほとんどのパン屋さんは130個作るんですよ。色付きが悪かったり、色むらがあつたり、カタチが悪かったり、その余剰分を提供いただけたら、助かる人がいますよね。でももし食中毒が起きたら、リスクを考え、廃棄処分することとで企業イメージを守るという考えが一般的でした。でも、これからエシカルの考え方や、お互い様という意識が広まって、提供することが社会貢献に繋がると

いう考えに変わってくるのではないかと思います。私たちの活動を理解してもらつたためにも、企業へ出向いて説明をしたり、セミナーや勉強会の講師として話をさせてもらうこともあります。

食品や食材を提供いただいた企業の方とも、もらいっぱなし、あげっぱなしの関係にならないよう気を付けています。『この前いただいた油で天ぷらをしました』とか、利用者との雑談の中で印象に

残った言葉をお伝えすることで、人と人を結びつけるきっかけになればと思っています。」

「フードバンクの活動も『地域に子どもの居場所をグループ・わいわい』も、共通して言えるのは、楽しんでいけることという佐伯さん。キッチンカーが自由に県内各所を走り、たくさん笑顔に出会える日が、早く訪れることを願っています。

食品のご提供のお願い
品質に問題がない食品（賞味期限が明記され、1ヵ月以上あるもの）などがありましたら、ぜひご寄贈ください。穀物（お米、麺類、小麦等）、インスタント食品・レトルト食品、保存食品（缶詰、瓶詰）、飲料（ジュース・コーヒー・お茶などアルコール類は×）、調味料各種、食用油、乾物（のり、豆など）、ギフトパック（お歳暮・お中元）など生鮮食料品以外のものをお願いいたします。不明な点は、事前にご相談ください。



徳島子ども食堂ネットワーク（事務局：特定非営利活動法人フードバンクとくしま）

場所 徳島市昭和町3丁目35-2 労働福祉会館ヒューマンわーくぴあ徳島105
電話 088-679-1919 URL <https://foodbank.roukyou.gr.jp/>

■フードバンクとくしまの日
毎月第4金曜を「フードバンクとくしまの日」として、寄贈いただいた食材を登録団体にお渡ししています。食材の受け取りを希望される方は「フードバンクとくしまの日」以外でもお渡しできますので、お問い合わせください。

■食品のご提供のお願い
品質に問題がない食品（賞味期限が明記され、1ヵ月以上あるもの）などがありましたら、ぜひご寄贈ください。穀物（お米、麺類、小麦等）、インスタント食品・レトルト食品、保存食品（缶詰、瓶詰）、飲料（ジュース・コーヒー・お茶などアルコール類は×）、調味料各種、食用油、乾物（のり、豆など）、ギフトパック（お歳暮・お中元）など生鮮食料品以外のものをお願いいたします。不明な点は、事前にご相談ください。



特定非営利活動法人 事務局 佐伯 雅子 さん

勤めていた会社の閉業をきっかけに、職探しをすることになり、知人から「あなたにぴったりの仕事がある」と紹介されたのがフードバンク。初めの1年間はやる気が出なかったのですが、「やるならやるで相手を喜ばせるような仕事をしろ」とご主人に言われたことで、気持ちを改め、仕事に向き合ううちに、様々な人との出会いで意識が変わり、今では率先して活動を広めるため、奔走しています。



がモニタリングを兼ねてカフェに通っていたり、館内に並ぶパンやお惣菜、お弁当を求めてお昼時には地元の人やお子さん連れのママたちなどたくさんの方で賑わう憩いの場になっています。

そんな穏やかなカフェの向こう側にある福祉事業所はというと子どもたち、お年寄り、障がいのある人、地域の人、すべての人が交じり合い、同じ空間で生活を送っています。

管理者の田中さんは、多くの業務をこなす中でも、子どものケアに関して、職員とも話し合い、「まず職員の研修しよう！」と障がいのある

「ここに行ったら助けてくれる」子どもたちの安全地帯を確保するために

子どもたちを受け持っている事業所の担当者はもちろん、高齢者福祉の担当職員も全員、研修を受け、勉強を重ねていったといいます。

職員はパートさんも入れて現在28名。「強い女の人ばかりです。強い女性たちが愛情をもって、新人も厳しく育てています。」と、その遅しさとアットホームな雰囲気に着かれ、「ここで働きたい」と利用者からスタッフになる人も多いといいます。

何かあったときに「ここに行ったら助けてくれる」と子どもたちに知ってもらうためにも、「継続すること。継続できなければ何もできない」と話す田中さん。学校や学童、保育園、コミュニティセンター、児童館、民生委員や児童委員など、施設開設時から連携をとって、イベントのチラシを掲示してもらうなどの交流を続け、心配な家庭の保護者とも自然と会って話をし、保護者同士でも話ができる機会を設けているといいます。

「つだまちキッチン」の開設と共開始した子育て支援イベントや地域交流イベントは外部講師も招いて行

い、様々な人が関わりあうことで、孤立を防ぎ、互いに助けあうネットワークの構築に役立っています。

当初、イベントとなると特別な日という感じで、認知症の高齢者や障がいのある子どもたち、一般参加の赤ちゃんやママたちが同じ空間で過ごせるか、不安に思い、心配して、気を遣うこともあったそうですが、高齢者が、うるさくしている子をしつける姿を見て、それが自然だと感じ、参加している人もそういう状況を受け入れるようになったそう。

今、コロナ禍でイベントも子ども食堂もお休みしているそうですが、子どもたちの居場所となるためにも「気を遣わず、飾らず入っていき、参加できる、受け止めてくれる人がいる」といった安心していられる場所」を作りたいという田中さん。

特別なこともなく、飾ることもなく、誰もが自然体で過ごすことができる「当たり前」の日常を築くことが、田中さんが目標とする「誰も孤立することのない地域社会の実現」のための第一歩といえます。その縮図が「つだまちキッチン」であり、そこでの日々が多くなるとして笑顔に溢れる時間になるよう願っています。



Tsuda Machi Kitchen(つだまちキッチン)

場所 徳島市津田本町2丁目3-57

電話 088-635-1295

URL <http://tsuda-machi-kitchen.asagao-fukushikai.jp/> ※利用料金など詳しい情報はホームページをご覧ください。

【つだまちキッチン(通所デイサービス)】
要支援、要介護認定者対象。料理を通じた機能訓練やアロマオイルエステも体験できます。

【つだまちキッズ(放課後等デイサービス)】
通所受給証のある小学生～中学生対象。学習と運動を中心とした療育が特徴。

【ユニバーサルカフェ(地域公益事業)】
日替わりランチ(11:00～13:00)は1日限定20食。コーヒーやパン、お惣菜などの販売の他、定期的に子育て支援や地域交流イベントも行っています。



Tsuda Machi Kitchen つだまちキッチン

すべての人が交じり合い、同じ空間にいて生まれる素晴らしい化学反応



ユニバーサルカフェという魅力的な空間

木造のオシャレな外観が印象的な「つだまちキッチン」。ここでは要支援、要介護の65歳～100歳を対象とした高齢者「デイサービス」、小学生～中学生を対象とした放課後等「デイサービス」を行っています。隣接し

た場所には児童発達支援事業所、近隣には成人女性向けの共同生活援助、60歳以上の一人暮らしで傷病等の理由で食事の準備の困難な方を対象にした配食サービス、誰でも利用できるユニバーサルカフェといった事業を行っています。

このような外観デザインにしたのは、いかにも「福祉施設」と思われるような場所にしたくなかったという保岡統括施設長の思いがあります。

「外観も『スターバックス』みたいにしてとお願いして、あえて「デイサービス」の看板も付けませんでした。その方が気軽に入りやすいです。



よね。ユニバーサルカフェはどんな方にも利用していただきたいので、近所のお年寄りやお子さんたちが来て、気軽に声をかけあえるような、オープンな雰囲気を作るためにも見た目にはこだわっています。」

カフェスペースの隣には交流スペースがあり、その向こうに介護サービスや児童発達支援を行う福祉ゾーンがあるのですが、扉を隔ててガラス越しにデイルームの様子が伺えます。壁を設けて完全に分断してしまうのではなく、互いに気配を感じられるような、穏やかに繋がるほどよい距離感心地よく、それぞれ

地域に必要とされ、愛される施設に

が安心して過ごせるよう工夫されています。

「つだまちキッチン」のある徳島市津田地区には、もともと「デイサービス」や障がい者施設はありませんでした。開設にあたって町内会長さんや民生委員さんのお宅へ何度も足を運んで話を聞いたり、一軒一軒挨拶に回ったりして、徐々に信頼関係を築いていったといいます。

「初めはなかなか受け入れてくれなかった地域の方も、事業所として地域のお祭りに出店したり、敬老会での介助や一人暮らしの高齢者の食事への送迎、自主防災のお手伝いなどをしたりしているうちにだんだん距離が近くなり、受け入れてもらえることができました。

一度受け入れてもらうと、すごく温かく接してもらえて、繋がり強い、良い町だと思います。」

今では「幼馴染なんじゃ、ワシら」と80歳を過ぎたおじいさんたち

管理者 田中 智子さん



約15年勤めたアパレル業界から福祉へ転身したのは、『社会福祉法人あさがお福祉会』福祉の統括施設長の保岡伸聡さんから声をかけられたのがきっかけ。保岡さんは高校の先輩で、田中さんのサービス業での勤務経験を活かし、「サービス業としての福祉」という視点で福祉に携わって欲しいと依頼。「介護のことも全然何も知らなかったんですが、逆に知ってたらできなかった」と当時を振り返ります。



子育てほっとスペース すきっぷ

マタニティさんの利用も歓迎 切れ目のない支援を目指して

0歳〜3歳の親子を中心に、切れ目のない支援を行えるよう、「マタニティさんからすきっぷデビュー」を合い言葉に、プレママ、プレパパなどマタニティの方にも利用を呼びかけているほか、徳島市保健センターの「こんにちは赤ちゃん」訪問事業で助産師さんが訪問時に「すきっぷ通信」を配付し、案内してもらっています。



また友達や知人の紹介、口コミ情報、インターネット検索やSNSでの情報を見て来訪される人も多く、イベントの時などはたくさんのお親子で賑わいます。

県内初の子育てサークル として活動を開始

松崎さんの子育て支援は自身の子育て体験に基づいています。奈良県から嫁いできて、見知らぬ土地で初めて子育てをする中で、「赤ちゃんを連れてお出かけできるところはどこ？子育てのことをどこに相談したら良いの？」の疑問から、乳幼児の子育てをしているママが笑顔になるために「あったら良いな！」をカタチにしたい。ただその思いだけで、活動を始めたという松崎さん。そんなある日、テレビで特集された大阪府貝塚市の公民館での子育てサークルの取り組みが目にとまり、この活動をヒントに藍住町で県内初の子育てサークル「おたまじゃくしくらぶ」を立ち上げました。

その1年後には、徳島市を中心に県内全域対象とした2つ目の子育てサークル「自然の中でいきいき子育て めいちゃんくらぶ」を発足。アニメ「となりのトトロ」に出てくるめいちゃんのように目の輝きをもつ



子どもに育って欲しいとの願いを込めました。

会員登録95家族、月2回の活動には毎回約75家族、180人くらいが集まって活動をしていました。そこで出会ったママたちのおかげで「仲間がいたら、こんなに楽しく子育てができるんだ！」と感じることができました。

平成5年には、くすのきのように根をしっかりと張り、大きな枝葉のごとく、徳島中に子育ての輪が大きく広がるようにと、現団体の前身となる「徳島子育てネットワークくすのき」を発足。子どもたちや子育て真っ最中のパパママたちが笑顔で楽しく子育てできるようにとお母ちゃん

多くの人の理解や協力が 活動の支え

松崎さんの活動は前例のない新たな取り組みでした。その後、自分たちで動いているうちに、行政にも理解してもらえるようになったといいます。

県教育委員会の生涯学習課の先生から連絡があり、自分たちの意見に耳を傾けてくれたり、乳幼児の子育て真っ最中のママたちが何に困り、何を求めているか、ニーズの聞き取りをしてくれたことは、とても大きな原動力になったとのこと。行政職員の中でもキーパーソンとなるような立場の人と出会い、その人が助成金の申請を行ってくれたことで、活動のために欲しかった備品を揃えることもできました。



で、行政の意識、社会の意識が変わっていったという松崎さん。国の少子化対策も打ち出され、子育て支援の機運の高まりもあって、松崎さんの思いも少しずつ実現していきま



こうした出会いが好循環を生み、活動が新聞等に取り上げられることで、次々と応援してくれる人が増えていったといいます。当事者である母親たちが動くこ

パパママ同士が繋がり 助け合う場所に

いよいよ夢が実現となったのは、平成15年9月1日、徳島市より委託を受けて、商店街の空き店舗を活用した子育てほっとスペース「すきっぷ」がオープンしたときです。

当初は、つどいのひろば事業として、今は社会福祉法第二種事業に位置付けられた「地域子育て支援拠点事業」となっています。この事業の目的は、①親子が気軽に交流できる場②子育ての相談やサポートが受けられる③地域に関する子育ての情報が得られる④子育てに関する情報に関する講習等、学ぶ場があること、まさしく私たちが長年描いていた微細な支援ができる場所でした。

10年間のボランティアでの活動の後、平成14年にNPO法人の認証を受け団体名を変更し、すきっぷの運営を始めました。「こんな子育て支援あったら良いな」を形に！自分たちの新たな夢への挑戦ができたことは本当に嬉しく、感謝の気持ちでいっ



※駐車場がないので、車でお越しの際は近隣の有料駐車場(コインパーキング)をご利用ください。お花見会や阿波おどり、ハロウィンなど季節ごとのイベントも行っています。
※コロナ感染予防対策のため、当面の間はご利用は人数制限をしていますので、予約制となっています。またイベントも中止となっている場合がありますので、お問い合わせください。



「すきっぷ」は赤ちゃんと一緒に親子で集いおしゃべりを楽しめる場、気軽に相談できる場、みんなが助け合って癒やされて笑顔になれる場所です。

個人情報を守られ、安全で安心できる場所なので、お子さんと一緒にぜひ立ち寄ってみてください。



特定非営利活動法人 子育て支援ネットワークとくしま (通称Kネット)
子育てほっとスペース すきっぷ
場所 徳島市籠屋町1丁目14
電話 088-626-5454
開所時間 10:00~16:00
休み 毎週水曜、第1・3日曜、第2・4土曜、祝日、年末年始 (不定休あり。詳しい開館日・休館日についてはHPをご覧ください。)
URL <http://www.knet-tokushima.jp/>



まつざき みほこ
●理事長 **松崎 美穂子**さん
奈良県出身。結婚を機に徳島へ移住。2人のお子さんも成長し家庭をもち、今では3人の「ばあば」となりました。「すぎの子木育広場すきっぷの森もっく」や「ゆめタウン徳島」などでの移動子育て広場や絵本の読み聞かせ、「とくしま子育て防災ネットワーク」、「あかちゃん授業」、「シニア子育て支援者養成講座」徳島ヴォルティスのホームゲーム時の託児など子育てに関わる様々な活動も積極的にしています。子育ての孤立化を防ぐため、オンラインで子育てひろばや育児相談などにも対応しています。

鴨島児童館

1964(昭和39)年に設立された県内で最も古い児童館。2014年からは学校法人鴨島学園(認定こども園めぐみ幼稚園めぐみ保育園)により運営されています。スタッフは館長+児童厚生員2名の他、ボランティアスタッフ多数。NPO法人眉山大学と連携し、海外からボランティアに参加する外国人との交流も行われています。



世界と繋がる児童館

県内には市直営の児童館が多い中、鴨島児童館は学校法人鴨島学園の指定管理によって運営されていることで、他の児童館に比べるとやや自由度が高いのが特徴です。児童館ではおやつはNGのところもあるのですが、ここではお菓子を食べながらの交流会も行われています。

そうした中でも特徴的なのが外国人ボランティアの方々と交流会です。

「今、NPO法人眉山大学と共同事業をしているのですが、眉山大学の代表理事 長谷川晋理さんは、国際ワークキャンプNICE(地域のために活動する合宿型のボランティア)の徳島代表も兼ねていて、長谷川さんの紹介で外国人ボランティアの方々と交流会も行っています。以前は一緒に料理を作ること



もしていたんですが、コロナ禍の今はそれができないので、オンラインで交流会を行いました。」と話す館長の山賀太郎さん。

スタッフの木村さんも普段接する機会の少ない外国人の方々と交流は、子どもたちにとって貴重な機会といえます。

「外国人の人々と一緒に過ごすことが子どもたちにとってはすごく大きな経験で、『いつかこの国へ行ってみたい』とか、夢を持てるかなあと、いろんな国の文化とか遊びを体験できることが子どもたちにとって相当刺激になっていると思います。」来館した方々の国名がホワイトボードに記されているのですがメキシコ、スペイン、ドイツ、ロシア、台湾…

その数14カ国!どうやって会話をしているのかというと、「基本は英語で。私はまったく分らないので、身振り手振りですけど、ちゃんと通じます。県内外の大学生もボランティアに来てくれて、異世代と異年齢、異国籍の人々をうまく繋ぎ合わせて、みんな一緒に遊べるのも良いなと思っています。」

未来の子どもたちのために みんなの力が集結する場所

鴨島児童館のスタッフは3名。館長1名、児童厚生員2名に加え、たくさんのボランティアや学生がサポートしています。地域で活躍している方々もそれぞれの特技を活かして、料理、クラフト、生け花、茶道、読み聞かせ、けん玉、硬筆、俳句、絵画などを子どもたちに教えています。

ボランティアは特に募集をしたわけではなく、純粋に「子どもたちとふれあいたい」、「未来の子どもたちのために!」と自然に集まってきているそう。



こうした活動の一環として行ったNPO法人眉山大学と共同事業『子ども放送局プロジェクト』は厚生労働省が発行する実践事例集でも紹介されました。

「子ども放送局プロジェクト」は吉野川市の小中高生が参加し、子どもたちによって地域のお店などの紹介動画を作成するというものです。どこを取材するかといったネタ決めから取材、動画撮影などすべて子どもたちが役割分担して行った取り組みです。この時に撮影した動画はYouTubeの『鴨島児童館子ども放送局』で観ることができます。

「支援を始めた頃は乳幼児親子が対象でしたが、18歳を過ぎても親として、ボランティアとして一生児童館に関わることが出来ます。そのよ



きむら ゆき 木村友紀さん

●児童厚生員 木村友紀さん
出産を機に保育士を辞め、子育てをしていたときに、吉野川市社会福祉協議会から乳幼児親子の交流を目的とした『つどいの広場事業』の運営を手伝って欲しいと声をかけられ、子育て支援の世界へ。保育士6年、つどいの広場2年、吉野川市子育て支援センターちびっこドーム6年、鴨島児童館6年のトータル14年間、子育て支援に関わり、親子が笑顔で子育てできるように、人との関わりを大切に、試行錯誤しながらがんばっています。



うな施設は他にないと思います。児童館に関わるようになって、私自身の世界観がどんどん広がりました。新しいこと、ニースに合っていることをいろいろと考えるのも楽しい!と運営に関わるようになりました。当初と今では考え方が変わりました。」と木村さんはいいます。

子どもたちのために 何事も『やる』方向で 全力を尽くす

鴨島児童館は県内に60弱ある児童館の中でも一番古い児童館です。もとは縫製工場だったところを改装して使っているのですが、学校に隣接



しているわけでもなく、むしろ小学校から離れているので、「児童館にどうやって人を集めるか」が一番の悩みどころといえます。

「行事をしていて子どもが集まらない、怪獣のおもちゃをちらかして帰ってしまったなど困ったことはたくさんあります。中でも予算面が一番苦労しています。市からの運営費で全てを賄うのは非常に苦しい。いつも赤字にならないかとヒヤヒヤしています。」という木村さん。

人それぞれ価値観も違い、たくさんの方が関われば関わるほど、様々なトラブルも増す中で、「それでも『やらな』じゃなくて、『やる』方向で全力を尽くしたい。そうすることで不思議といるんな縁が繋がっていきます。」という山賀さん。



児童館は なくてはならない場所

2020年春、自粛期間中は児童館の利用も制限され、様々なイベ

ンターが中止となりましたが、子どもたちが他者との関係性を築く大事な時期をどう過ごすかを考え、鴨島児童館ではいち早くオンラインイベントを始めました。オンラインは好評ですが、こういう時代だからこそ、実際に会って触れ合うことの大切さが身にしみたと二人。

「久しぶりに対面のイベントをした時、保護者の皆さん、私たちもみんなに会えることが嬉しくて、本当に会えるって良いな〜と思いました。児童館は人として大切なことを学ぶことができる貴重な施設。地域の人たちに育てられ、周りの大人からたくさん愛情をもらった子どもは、大きくなってからも郷土を愛し、また同じように子どもたちを守り続けることができると思っています。いつでも会いに来ることが出来るように、児童館はなくてはならない場所だと思っています。」



※鴨島児童館子ども放送局はYouTubeで見ることができます。



鴨島児童館

場所 吉野川市鴨島町知恵島1208番地2
電話 0883-24-2379
開館時間 10:00~18:00(月~金曜)、13:00~18:00(土曜)
休館日 日曜、祝日、年末年始



上八万児童館

児童館の醍醐味は 子どもたちの成長に長く 関わるることができること

小学生の放課後の居場所＝児童館というイメージがありますが、学童よりも児童館の成り立ちは古く、戦後間もない1947年(昭和22年)頃。「お母さんたちが農作業をしている間、安全に子どもたちの面倒を見てくれる場所が必要と、欧州の仕組みを見習ってきたものです。厚生労働省から出されている児童館ガイドラインによると0歳から18歳未満までの子どもが利用できますが、ここに来ていた子どもたちはおおむね中学生くらいまで。

コロナ禍の児童館

藤本さんは館長になる前からボランティアで関わっていたので、就任にあたり特に困ったことはなかったのですが、時代と共に子どもたちの環境なども変わっていき、児童館がどういった役割を果たしていくのが良いのか、試行錯誤しているといえます。

そうした中でも2020年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止



館において、地域外の乳幼児親子は徳島市のホームページに掲載している『児童館だより』を見て訪れていただきます。

スタッフは徳島市が募集している、保育士が教員免許が必要。上八万児童館では現在は館長1名、児童厚生員(職員)3名のうち1名は小学生が来館する時間のみ短時間勤務で対応している、行事の時などは、外部の講師や地域の講師の方に来てもらったり、子育て応援団のボランティアの方に来てもらい、運営しています。

のため、外出自粛や臨時休校など不安定な状況が続く、子どもたちにとってもストレスの多い1年だったと振り返ります。



ハラハラするぐらい全力で走り回っています。

コロナ禍で変わったことは他にもあります。

以前は宿題をする部屋に人数制限はありませんでしたが、密を避けるため、16人限定の20分の交代制に。ボールを使った遊びも交代で使用するというルールがあるので、『最初に宿題をやってからボールで遊ぶ』など、子ども同士で話し合い、自分たちでスケジュール管理をするようになりました。』思わぬきつ

けで計画性が養われたのは嬉しい変化だったといえます。

子どもたちの成長を 関係機関が連携して見守る

これまで、どちらかという乳幼児に関心を向けていたそうですが、最近小学生、特に高学年の子が気になるという藤本さん。

子どもたちの問題行動の原因は、学校でのトラブルを引きずっている場合や、家庭でのストレスによるケースもあって、『その背景は何だろっ?』と、よく職員とも話をしていきます。

ここではお迎えのときにお母さん、お父さん、おじいちゃん、おば

あちゃんとも話ができるので、『こんなことがありました』と報告して、家庭での様子を聞いたりしています。

小さいうちとはちがく、小学校の高学年くらいになるとお母さんたちがちよつとした悩みを相談できるころって、意外と少ないと思うので、どう解決していくかを一緒に考える機会があれば良いな、と感じています。

乳幼児から小中学生、ひいては大人になるまでトータルに子どもたちの成長に携わることができること、地域の保育所、幼稚園、小学校などと連携し、気になる子どもや親御さんを見守り・支援することができることは児童館の良いところですが、個人的な問題にだけ関わってはいけません。

各家庭の事情にはあまり深く立ち入らず、かといって見逃すわけでもなく、ほどよい距離を見極めつつ、そっとサポートしていきたいという藤本さん。

子どもたち一人ひとりの様子を把握するために児童館に来てもらうだけでなく、藤本さん自ら保育所、幼稚園、小学校な

どへ読み聞かせに行ったり、行事に参加したりして、常に連絡を取り合っているそう。

公民館とも合同で行事をしたり、地域の夏祭り、文化祭はまちづくり協議会との共催で進めたり、外部講師にもできるだけ地域の方に来ていただくなど、連携して子どもたちの成長を見守っています。

児童館をもっと活用しよう!

子どもたちと接する中で嬉しいことを伺うと、年上の子が年下の子と遊んだり、遊びを教えたりしている姿を見ると嬉しいですね。時には子どもたちから投げかけられた質問に的確に答えられなかったり、言葉足らずだったなと思うこと、配慮の必要な子にもっと良い関わり方がなかったのかと反省することもありますが、日々、子どもたちの成長を身近で見られることが嬉しいですね。』と話す藤本さん。

子育て支援を始めた頃は、ただ夢中に活動していたそうですが、今は何が必要か、そのためにはどうするべきかを考え、独自の取り組みも行っています。そのひとつが重い障がいのある方との交流。『障がいのある人も一緒にいるの



が当たり前。他人を思いやる気持ちを培い、一人ひとりが認められ、児童館が安心して楽しく過ごせるみんなの居場所と思ってもらうためにも、世の中にはいろんな人がいるんだというところを感じて欲しい。』と月に1回、交流の機会を設けています。

最初は不思議そうに接する子どもたちも、自然と車椅子を押ししたり、相手の状態について年上の子が年下の子に説明するなど、助け合いながら交流が続いているといえます。

その他、月替わりの『チャレンジ企画』も子どもたちに大人気。バケツの中に入ったどんぐりや松ぼっくりの重量当てなど、夢中になって取り組むことが、心と体の成長に繋がっています。

上八万児童館

場所 徳島市上八万町樋口61番地 上八万コミュニティセンター内
電話 088-668-6391
URL <https://www.city.tokushima.tokushima.jp/smph/kosodate/ikuji/jidoukan.html>
対象 乳幼児～概ね小学生まで
開所時間 平日9:30～18:00、土曜10:00～17:00
休み 日曜・祝日、年末年始(12/29～1/3)

※小学生未満は必ず保護者同伴で利用ください。館内には貴重品や自分のおもちゃ等の持ち込み禁止。原則として、館内での飲食はできませんが、乳幼児にかざりお弁当を持参の場合、昼食をとることができる曜日・時間帯もあります(詳しくは児童館に問い合わせを)。



ふじもと みえこ
●館長 藤本 美恵子さん
大阪府出身。乳幼児から大人まで幅広い世代を対象とした社会体育の仕事をしてきたが、結婚を機に徳島へ。常々「子育て支援がしたい」という思いがあり、鳴門教育大学の大学院で幼児教育を専攻。在職中に幼稚園教育、保育士の免許を取得。児童館や保育所、幼稚園などで読み聞かせボランティアを行い、主任児童委員として活動する中で、10年前に「館長をしませんか?」と声が掛かり、「ぜひ!」と上八万児童館の館長に就任しました。



一般社団法人 ひとみ学舎

社会の中で生きづらさを感じている子どもや大人に対して、自分の特性に気づき、それをいかして自分らしく生きていくための支援を目的に、従来の教育法に基づいた学校とは異なる学びの場となるオルタナティブスクールを開設。子ども歩き遍路や子どものwell beingのために大人ができることを考える大人たちの勉強会も行っています。

オルタナティブスクールは 新しい選択肢のひとつ

『ひとみ学舎』は、オルタナティブスクールというスタイルで、学校以外のもうひとつの学びの場としての選択肢。発達障がいなどで不登校になる場合もあり、なんとなく自分の生き方に悩んでいる人や他人との関係がしっくりいかないと感じている人など、小学校2年生〜高校生までを対象に、子どもたちが感じる生きづらさや向き合い、自分の個性を活かしつつ、社会とどう関わりながら生きていくかについて子どもたちと一緒に取り組んでいます。

『ひとみ学舎』のスタッフは学生から50歳代を中心に80歳代の方もいらっしゃいます。昔から手伝ってくれている方に加え、『ひとみ学舎』を修了した方がボランティアに来てくれていることも。ボランティアの方々は子どもたちの活動支援や、子どもたちの話を聞くことなどのサポートをお願いします。

居上さんがこの活動・事業を始めようと思ったきっかけは、大学院の

教授から「日本の教育システムだけが教育のすべてではない」と教えてもらったことがあるといいます。

海外の教育観や日本の歴史を振り返ってみても様々な教育観があり、その変遷で今の教育システムができています。このシステムによって救われた人もたくさんいるので、それを否定はしないけれども、すべてではない。そう教えてもらったこと、長年教員として子どもたちと関わった経験から、自身が思うような関わり方でできる教育というものに挑戦しても良いんじゃないか、「自分が納得できる関わりをしたい」と



思い、『ひとみ学舎』を立ち上げられたとのこと。

大切にしていることは、 「人はみんなちがう」と 「急がない」

この活動を行ううえで最も大切にしていることは「人はみんなちがう」と「急がない」の2つ。子どもによって見えている景色がまったく違つと感じた体験がいくつもあってあります。

「ある男の子が、幼稚園の時に先生に『来た順に並んで』と言われて『来た』を『北』と思い、『北はどこですか？』と先生に聞いたら『あっちです』と言われ、指さしたところに並んだんですね。そしたら誰もそこへは並ばなくて、すごく戸惑ったそうです。

小学校3年生になって初めて『来た順』の意味を質問できるようになり、到着順に並ぶということが分かったそうなんです。小学校3年生になるまでは、なぜみんなと違うことをしてしまうのか本人も分からなかった。ここで過ごす子どもたちには自分や他人を大切に、正直であって欲しいという居上さん。

最後に、この活動がどういう存在かという質問に、「ワクワクする、面白い、新しい物事、人に会えるきっかけをくれるところ」という答えをいただきました。人生は「ひっくり返ったおもちゃ箱」怖いことやつらいことがあったとしても、それはおもちゃ箱から出てきたものだから心配ない。次に何が出てくるかわからないことを楽しみながら生きていきたいと、子どもたちと共に過ごす時間を大切に、自分が納得できる関わりを模索しながら、一人ひとりにあった教育を実践されています。



ないし、先生もなぜその子だけの行動をするのか分からない。みんな分かっているものと思いついでいるので、こうした話からもその溝を埋めるには時間や経験を待つしか方法がないんじゃないかと思っています。子どもたちそれぞれのペースを大切に、「人はみんなちがう」「急がない」を心がけています。

子どもたちから思いかけない話が飛び出すこともあり、子どもたちの話を聞くことがとてもおもしろいという居上さん。その度に「人はみんなちがう」ということを実感し、子どもたちのエネルギーの大きさに驚くといいます。



【活動内容】

釣り・テニス・ハイキング・料理・編み物・学習課題など
月・火・木・金 9:30～15:30(毎月16日程度)
日課: 9:30～9:45 ミーティング(1日の生活の計画)
9:45～12:30 活動
12:30～13:30 昼食・掃除(*基本昼食は持参)
13:30～15:15 活動
15:15～15:30 ミーティング(1日の生活の反省)



不登校だからといって、その子たちが悪いわけではないのに、学校に行かない自分に罪悪感を抱いている子どももいます。また不登校の子どもをもつ親も「自分の育て方が悪かったんじゃないか」と不安に思い、自分を責める人もいます。

「子どもは守るべき存在であると同時に、一人の人間です。全面的に

子どもたちには 正直であって欲しい 自分や他人を大事にして 欲しい

そしていろいろな子どもを見てきた経験から、どんな子どももどんな大人も「人は信頼に足る」存在だと実感しているといいます。

守らなくてはいけない時であれば、一人の人として見守る方が良い時もある。その割合は人によっても年齢によっても違い、答えがないと思います。子どもたち一人ひとりがどうしていくのが良いのか、大人が何ができるかを考えて、そのとき、その子どもにとってベターな選択ができる良いんですが、それを行うのは本当に難しいと感じています。

学校へ行かなくても、どうやって生きていくかは誰もが考えなくてはならないことです。その方法を見つけるためにも「何が好き?」「どうしたい?」とたくさん質問して、たくさん考えてもらうようにしています。



一般社団法人 ひとみ学舎

場所 鳴門市大津町吉永130-2
対象者 小学生～高校生
定員 1日の利用者は10名以内

※利用料金など、詳しくは、一般社団法人ひとみ学舎までお問い合わせください。



いがみ くみこ
●代表理事 居上 公美子さん

小学校教員として28年勤務(公立小学校・鳴門教育大学附属支援学校)。子どもたちと過ごす中で、子ども一人ひとりと向き合い、自分が納得できる関わり方をしたいと、教員を退職し、2015年4月に『ひとみ学舎』を開設。名前の由来は「ひらめきときめきみらいを見つめる」の最初の一字を組み合わせたもの。



外遊び場 さっちゃんち よこ

禁止事項をできるだけ減らし、子どもたちが「やりたい！」と思ったことを自由にできる場所、プレイパーク。参加に年齢制限はなく、子どもたちが親世代、祖父母世代などの異世代や、地域の人と関わり合いながら成長できる交流の場です。みんなが楽しく遊べるよう注意を払い、ケガや思わぬトラブルに対応するプレイヤーリーダーが在駐しています。

そうだ！ プレイパークを作ろう

伊沢小学校近くの住宅街、土管やツリーハウスのあるプレイパーク「外遊び場さっちゃんちよこ」。さっちゃんとは、遊び場プロジェクト代表の坂本紗智子さんのこと。坂本さんのご自宅の隣にあるから、さっちゃんちよこ」と命名されました。

プレイパークとは全国に約450カ所あり、ブランコやシーソーなどの遊具がある公園ではなく、原っぱのような広々としたところで、子どもたちが自由に「やってみよう」と思うことができる場所です。

住宅事情や子どもたちをとりまく環境の変化もあって、年々、外遊びの機会が減少している昨今、子どもたちがやりたいと思ったことを自由にできて、のびのび遊べる場が「あったら良いな」という思いから、プレイパークを作ることを決意しました。

「テレビでまたまた子どもたちが自由にのびのびと外遊びをしている映像を見て、自分の子どももこのよ

うに育って欲しいな、こんな環境で遊ばせてあげたいな…って思ったのがここを作るきっかけです。」

「自宅の横にご主人の両親が所有している空き地があり、当時、『どうする？』と活用法について話し合っていたタイミングだったので、『ここにプレイパークを作ろう！』と決めたとい

います。そう思い立ったものの、プレイパークを作るにはどうしたら良いのか分からず、社会福祉協議会へ相談します。二人ではできないから、仲間を集めた方が良さ」というアドバイスに基づき、子育てサークルに声をかけて仲間を集め、プレイパークへの理解を請うべく、教育委員会へも訪問。プレイパークの活動が盛んに行われていた岡山県にも視察に行き、着々と準備を整えていきました。

さっちゃんち、土管をもらおう

その頃、県内でプレイパークといえば、徳島大学の学生が月に2、3回、子どもたちを公園に集めて遊ぶ

会があるくらいでした。テレビで見

たような、広い公園にプレーリーダーという専属のスタッフがいて、朝から夕方まで開催している遊び場に憧れつつも、身近にモデルケースとなるような事例もなく、どのよう

に場の整備をしていくか、ママ友たちと集まっては「こんなのがあったら良いな」とイメージを膨らませていったといいます。『ドブえもんに出てくるような土管であれば良いよねって話していたら、土木関係の方で「土管をくれる業者さんがあるよ」って教えてくれた。『土管だけ貰ってもどこかに転がっていかももしれないから、土ももらえたら良いの』って言ってたら、『土もあげる』って、運んできてくれて。まさかこんな大きい土管がもらえるなんて思ってなかったの

で、とてもありがたいです。』砂場を囲む枕木もあつたら良いな

と思い、「JRに連絡して交渉し、『子どものためなら差し上げます』と提供いただいたのだとか。

え、徳島大学の学生が月に2、3回、子どもたちを公園に集めて遊ぶ

で遊びますが、慣れてくると好きなように遊び始めるのだとか。何度か来るうちに、ある子どもは地面を掘って落とし穴を作ったり、水路を作ったり。こちらが用意した物を使って遊ぶのではなく、次第に自分たちで考え、創造して遊ぶことができるようになっていくとい

います。「初めて来た子どもは少し緊張している場合もあるんですが、『何をやっても良いんだ』って分かる、気分がのってきて『次、何しよつか』と自分で遊び出します。そんな風に遊び方が



変化していくのは見ていて面白いですね。子どものやりたい気持ちにできるだけストップをかけないよう、2歳くらいの子どもが金槌やのこぎりを使うのも止めないようになっています。』

こつした道具を小さい子どもが使うのを「危ない!!」と心配して、

止めさせる保護者もいるぞ。』「たしかに子どもが金槌を使って、自分の手に当たって泣くこともあるんですが、子どもの力で叩く分には大した怪我にはならないんです。痛みから学ぶこともあるし、むしろ大人が下手に手を出す方が危ない場合もあります。遊びの中に成長の糧がたくさんあるので、子どもたちの『これをやりたい!』という気持ちをできるだけ優先させたいと思っています。時には保護者や周りの大人たちがそれを妨げてしまうこともあり、理解してもらえよう、対応していきたいと思っています。』

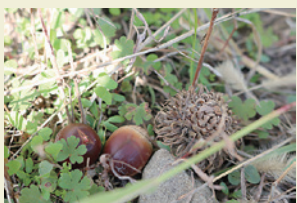
プレイパークの精神は そのままだ 成長と共に変化する遊び場

坂本さんがプレイパークを始めたのは産休・育休中。お子さんの同級生を中心に利用が広がり、ママ友たちの協力もあって運営していました。が、仕事に復帰した現在には月イチ開催が限度。自身の子どもたちも大きくなり、小学校4年生くらいになると、この場所ではちょっと狭くて遊びきれなくなっているといいます。「もっと広い場所でプレイパークができれば、高学年になっても遊び



やすいと思うのですが、この広さではやりたい遊びがあっても、小さい子に気を遣いながら遊ばなければいけないので、それではやりたい遊びじゃなくなってしまうな、と。

プレイパークとは違っていますが、グラウンドを使って遊ぶ会をしました。プレイパークはライフワーク。息子の同級生の子どもたちもたくさん来て、一緒に野球をしたり、かくれんぼしたり、広い場所で鬼ごっこしたり…。思いつきり遊べたみたいで、よかったです。思いました。』



子どもたちの年齢が上がるとともにママたちもプレイパークを卒業していき、また新しい利用者が運営に協力してくれるという循環ができつつあるという坂本さん。坂本さんにとって、プレイパークはライフワーク。今後も民生委員さんや地域の人々と協力しながら、続けられることを願っています。

プレイパークの利用者は未就学児〜小学校低学年くらいまでの子どもとその保護者。大半がチラシを見て集まってくるといいます。運営は保護者の方や民生委員の方がボランティアで行っています。子どもたちは、最初のうちは木工作や小石ペイント、シャボン玉などはじめから用意して出している道具

子どもたちの「これ、やりたい」を 止めないで

力が、夢の実現へと繋がっていき、2016年4月2日に第1回プレイパークイベントを開催することができました。



代表 さかもと さちこ 坂本 紗智子 さん

小学校の先生でもあり、3人のお子さんのママ。2015年10月、東京にあるプレイパークを紹介しているテレビ番組を観て、「こういう場所が家の近くにあればいいな…というより、家の横にあったらいいな」[隣の空き地を子どもたちの外遊びの場所にできないかな?]と考え、プレイパークを作るべく、2016年2月に遊び場プロジェクトを発足。現在は、月に1回外遊びイベントを開催している。



外遊び場さっちゃんち よこ

場所 阿波市阿波町綱懸259-2
電話 090-1575-6864
対象 未就学児〜小学校低学年くらいまでの子どもとその保護者
開所時間 土曜 10:00~12:00頃



厳しい環境で育ってきた子どもたちが安心して暮らせる家を

特定非営利活動法人はばたき

児童自立援助ホーム ゆめ

県内唯一の自立援助ホーム

自立援助ホームは全国に199カ所ありますが、県内には一カ所だけ。その一カ所が平成30年2月にオープンした『児童自立援助ホームゆめ』です。

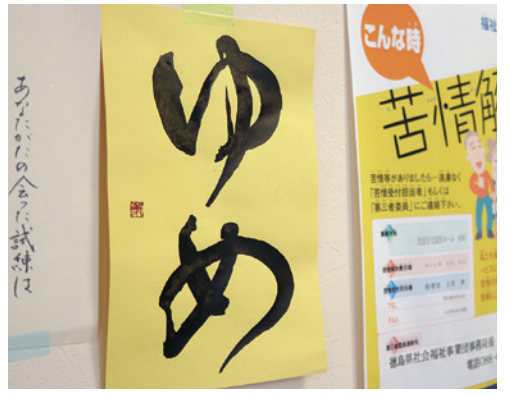
創設者の阿部さんが自立援助ホームを始めたのは、二人の女の子の里親をしていること関わりがあります。「最初に里子に迎えた女の子が

当時、小学1年生だったので、今年で7年目で、今、中学生。週末里親なのですが、ここを作ったのはその子が児童養護施設を出ても暮らせる場所があればと思って。児童養護施設は18歳で出ていかないとけないのですが、親がいないといっただけで、18歳で『一人で暮らさない』『一人で仕事を探さない』というのは酷だな、と。児童養護施設は申請すれば大学卒業までは生活できますが、自立を目指す子どもが安心して

勉強や仕事に励むことができるよう、『ゆめ』を作り出した。」

子どもたちを身近でサポート施設長 上原さん

『ゆめ』の利用対象となるのは、義務教育を終了した15歳〜20歳（就学生の場合は22歳）の女性。児童相談所の決定で入所し、就労による自立、または就労就学の両立を目指しながら生活します。高校生は家賃免除、就業している場合は家賃2万円という金額設定は、様々な理由で親の支援を受けられない子どもたちの将来を思っていること。」進



学したり、資格を取ったり、ちょっとでも上を目指してもらいたい。次の世代の子どもの貧困に繋がることがないようそれをどこかで断ち切らないことには同じことの繰り返しになると思います。」と阿部さんは話されました。

上原梓さんは愛媛県の自立援助ホームで6年半の勤務経験がある頼もしい指導員です。2019年から『ゆめ』の指導員として子どもたちに

が必要なおところはありますね。すごく傷つきやすく、自分が生きていて良いのか考えてしまうデリケートな子どもが多いですね。」

定期的な心理士さんも来てサポートしてくれています。子どもたちが話したい時に話を聞けるよう、スタッフはできるだけ近くにいます。」



子どもたちに関心を持つこと、気付くこと、コミュニケーションを大切にしています。子どもとの関係構築は難しいですが、子どもたちの関わり、成長を間近で見られることは嬉しいことです。まずは子どもたちののびのび、リラックスして過ごせることが一番必要だと思います。」と上原さん。

新しい夢は働く場所を作ること

県内の小学校でも不登校のケースがあり、『ゆめ』には学校の先生が相談に来られることもあるのだとか。

「中学校で不登校になって、卒業して引き込まったら、なかなか支援に繋がらないですね。里親さんや養護施設から巣立った子どもたちだけでなく、そうした自立に向けたサポートが必要な子どもたちにもここを使ってもらえたら良いんじゃないかと思っています。」

児童相談所やソーシャルワーカーなど仲間を通じて、こうした場所が

あることを知ってもらおうと日々活動を続けています。が、そうした子どもたちが将来、自立して生活していくためには、働く場所を作る必要があると考えるようになったといいます。

人との関係を築くのが難しい子どもたちの就労場所として、思い浮かんだのは農業。阿部さんは水耕栽培でメロンやイチゴ、マンゴーを作りたいと考えているそうで、フリルレタスの水耕栽培をしている企業に協力いただき水耕栽培の勉強をはじめたいといいます。

レタスや野菜などの葉物は折れたりすると、すぐダメになってしまう上、管理も難しいのが、その点メロンなどの果物は収穫時期が限られるものの、販売価格も高く、肥料や温度調整をきちんとすれば育てやすいと、新たな夢が膨らんでいます。

「これもひとつの夢、なんでも、どこまでいけるかわからないですけどね。ひきこもりの子どもや進学できなかつた子どもも、自立して生活できるように、次の展開を考えていきたいと思っています。」



上原さんや児童福祉に関心のあるスタッフが対応しています。ハローワーク、シルバー人材センターなど



うへはら あずさ
●指導員 上原 梓さん

愛媛県の自立援助ホームでの6年半の勤務経験を活かし、2019年12月『児童自立援助ホームゆめ』の指導員として徳島へ。同じ自立援助ホームでも各所それぞれやり方が異なるため、はじめは戸惑うこともあったそうですが、今では子どもたちにとってお姉さんの存在に。「職員間のコミュニケーションを大切にし、連携をとりながら、青少年の自立支援をサポートしていきたい」と意気込みを語りました。

特定非営利活動法人はばたき 児童自立援助ホーム ゆめ

場所 板野郡藍住町徳命字元村148-1
電話 088-635-6278

入居の定員は6名。
※詳しくは、児童自立援助ホーム ゆめまでお問い合わせください。

●座談会出席者



なるとにし てとてとて代表
ささき ゆき
佐々木 由紀 さん



NARUTO 総合型スポーツクラブクラブマネジャー
やまもと えみ
山本 恵美 さん



なると子ども食堂「わくわくキッチン」代表
わき けいこ
脇 景子 さん



鳴門市役所 健康福祉部 子どもいきいき課課長
くろはま まさあき
黒濱 政章 さん



社会福祉法人 鳴門市社会福祉協議会 事務局次長
ふじわら よういち
藤原 陽一 さん



社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会 子どもの居場所づくり主任コーディネーター
かねひら かずえ
金平 和江 さん



徳島県未来創生文化部 次世代育成・青少年課 子ども未来応援室室長
おおい ふみえ
大井 文恵 さん



国立大学法人 鳴門教育大学大学院 子ども発達支援コース 准教授
きむら なおこ
木村 直子 さん

オブザーバー 鳴門教育大学 子ども未来応援プロジェクトメンバー
川村さん・清藤さん・渡辺さん・仁木さん・アグンさん・野見山さん・神崎さん・三谷さん



my place
地域における
子どもの居場所を考える
座談会
～鳴門市からの発信～

日時:2020年10月22日 10時～11時30分 場所:鳴門教育大学A3会議室

鳴門市で先進的な子どもの居場所づくりの活動をされている3団体の方々を中心に、鳴門市、鳴門市社会福祉協議会、徳島県社会福祉協議会、徳島県、鳴門教育大学がともに、地域の中にある子どもの居場所の更なる広がりを持続可能な運営のための仕組みや方策について、意見交換をしました。

木村 本日は、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

今回の座談会のテーマは、「地域における子どもの居場所を考える」(鳴門市からの発信)です。子どもの居場所について、お集まりの皆様のお声、お声、様々な話をお聞かせいただき、地域の中で子どもの居場所を定着させ、広げていく方法を一緒に考えていきたいと思います。まずは、皆様の取り組みなどをご紹介ください。

大井 県子ども未来応援室の大井です。県内でも、このコロナ禍の大変なときだからこそ、地域ぐるみで子どもを支え、工夫しながら、温かい支援を継続されている子どもの居場所が注目され、広がりをみせております。県では、民間主導で展開される子どもの居場所を、各地に広げ、持続可能な運営となるように、令和元年5月、県民・団体・企業・行政が連携・協力して行動していく指針「徳島県「子ども居場所」づくり推進ガイドライン」を策定いたしました。これに基づきまして、県下全域にネットワークのある県社会福祉協議会に子どもの居場所づくり推進コーディネーターを配置いたします。



ただ、直接的な支援を推進しているところがございます。また、困難を抱える子どもたちを支援するため、ネットワークづくりの調整役を担える人材として、子どもの未来応援コーディネーターを養成しているところがございます。

金平 県社会福祉協議会で子どもの居場所づくりのコーディネーターをしております。金平です。県社会福祉協議会では、昨年9月から、子どもの居場所づくり推進コーディネーター事業が始まり、今年で2年目となります。この事業は、子どもの居場所づくりに取り組んでいる方や、これから始める方、始めたけれどよく分からないといった方への相談対応をしたり、「子ども居場所づくり応援サイ

ト」の運営や子どもの居場所づくりを推進するためのパンフレット・パネルの作成など情報を発信しています。

脇 鳴門子ども食堂わくわくキッチンの脇です。鳴門市の斎田公民館をお借りして、2018年の11月から1回ずつ活動しています。鳴門市の子どもいきいき課や地区社会福祉協議会からのご支援をいただきながら、運営しています。活動前に、チラシを撫養小学校(斎田公民館の向かい側にある)鳴門第一中学校に配っていただき、周知しています。一応60食限定としていますが、来る人拒まずで、どなたでも受け入れしています。今は新型コロナウイルスの影響もあり、入り口で名前と連絡先を記入してもらい、後で連絡ができるようにしています。運営スタッフは、もともと撫養小学校のPTAのOBで、子どもの居場所や貧困対策となっているかなど自問自答しながら活動しています。毎月、1時間でも2時間でも、子どもたちがごはんを食べて過ごせる場所があればいいのかな、何かすく自分困ったときに、ここには頼れる人がいるかと思ってもらえる場所にしたとお願い開催してい

ます。何かお知恵がありましたら教えてください。

山本 NARUTO総合型スポーツクラブの山本です。「NARUTO総合型スポーツクラブ」は、地域の赤ちゃんから高齢者まで集まって、色々なコミュニティを作ることを目指して、8年目となりまして。活動している時々に、地域の様々な課題に気付き、解決していこうと一つ一つ事業を進めてまいりました。

立ち上げ当初は、0歳から就学前の子どもとママを支援したいという思いで、リトミック&ママのエクササイズをはじめ、NARUTO総合型スポーツクラブの拠点を立ち上げました。もう一つは、鳴門西小学校区の児童クラブが満杯状態で子どもたちの行き場がなく、困っている保護者の声から「キッズステーションNARUTO」を立ち上げました。ここでは、特に課題となっていた長期休みの預かりや、平日の午後からの児童、学童クラブを運営しています。

運営している中で、働いているお母さん方が迎えに来られるのが19時、そこから、家に帰ってごはんを作って、子どもは何

時にごはんを食べているのだから、朝、何時に起きているのだろうと疑問を持ちました。そこで、今年から、鳴門市の支援をいただき、子ども食堂を開設しました。コロナ禍で9月から、現在4回ほど開催、70人から80人ぐらい利用されています。子どもたちにとって、夕食を食べる時間が、夕飯を楽しむに時間であり、保護者などのコミュニティの時間に変わってほしいなと思っています。また、市社会福祉協議会のご支援をいただいで、

佐々木 なるとにしてとてとしての佐々木です。「なるとにしてとて」は、鳴門西小学校、成稔幼稚園、鳴門中学校で読み聞かせを行うボランティアグループを母体として、2013年に立ち上げた団体です。鳴門に

え、親子で学びかけを得ようと活動してきて、これまでにLGBTQやお小遣い(お金の使い方)など学びました。また、SDGsを地域で考えてみよう、鳴門教育大学の図書館で特別展示や読み聞かせ会をしたり、小学生がエシカルクッキングを学んだり、地域の大人と小学生がカードゲームを行ったりました。

一人っ子や、県外からの転居世帯・核家族世帯では、親以外には学校関係や友達達の保護者ぐ





会では、これまで高齢者を中心とした。取り組みが多くを占めておりました。現在は、地域の民生委員・児童委員の訪問時、何でも相談をどうぞという「親子ですくすく声かけ訪問事業」や、未就学の子どもと保護者を対象に、元保育士に来ていただいたて手遊びをしたり、雑談や悩みを聞いてもらったりする場を設ける「親子ひろば事業」を実施しています。

鳴門市地域福祉活動計画の策定時に、多くの方々から「地域の方々と子育てをしていきたい」「若い人に地域の子育てに参加してほしい」という意見をお伺いしました。鳴門市内で先進的に実施している活動を、ぜひ紹介して広めていきたいと考えています。

少しですが、ボランティア活動の補助等の支援もしています。まだまだ、広がりがないことがこれからの課題だなと思っています。

黒濱 鳴門市子どもいきいき課の黒濱です。鳴門市では、子ども居場所づくりを令和元年度より推進しております。地域の居場所づくりや子育て支援を目

ますか。
脇 子どもたちが手ぶらで来ても、時間を過ごせるように、人生ゲームや折り紙、画用紙などを少しずつ揃えたりしています。公民館は、土曜日は他の団体があまり使っていないので、走り回れる広い空間が確保でき、子どもたちも気兼ねせずに来られるかなと思います。

昨年、ずっと来ていた中学生が、何度か来るうちに、早めに来てくれるようになって、自分から「手伝おうか」と言ってくるようになった。そういう子が、また出てきてくれるといいなと思っています。

山本 子どもの居場所を始めたのですが、貧困の子どもとか、支援を必要とする子どもを支援したいと思っても、それを打ち出してしまうと、逆に子どもたちは居場所に来にくいと思うのです。自然体で来られるような居場所とすることが一番なのかなと思っています。こんな楽しいことをやっている場所があるよということが広まれば、自然体で来られるのかなと考えています。

佐々木 山本さんがおっしゃったように「自然体で集まれるところ」というのが良いなと思

的とした子ども食堂や学習支援を実施する団体に対し、運営するための初期経費や初期費用の補助を行う取り組みは、県内の市町村で初の先進的な取り組みです。初めての申請団体に、備品や消耗品等に係る初期費用として上限10万円を給付しています。運営経費として、食事提供と学習支援の2種類があり、それぞれの上限が20万円、食事提供か学習支援のいずれか又は両方から選択可能となっております。初めて採択された団体については、1団体あたり上限50万円となります。この事業は2年目を迎えますが、課題もあると考えておりますので団体の皆様から忌憚のないご意見をいただき、今後の参考にしたいと思っています。

木村 鳴門教育大学の木村です。昨年度から、徳島県が実施する「子どもの居場所づくり推進事業」に、大学の連携事業として学生とともに参画させていただいています。

この連携事業を進めるにあたっては、大学内に、「子ども未来応援プロジェクト」を立ち上げました。子どもの居場所に取り組む方から依頼がありましたら、十分な感染症対策と予防

めて思います。自然体でいられる居場所を作るといふ点では、皆さん色々工夫されていると思います。山本さんがおっしゃられたように、「貧困」とついた所にはあまり行きたくないです。よね。どの人も、何かしらに自然体で行く居場所というものを目指したいですね。

佐々木 自然体で…というのは、すごく難しいですね。私たちも悩みます。ただそこにある、毎月している、そういうことが大事なんじゃないかなと思っています。今日は行かない、次も行かない。だけど、ふと行けるかもしれないと思った時に、行きたいとか。月一度だけでなく、毎週日曜日に実施できたらと思



うのですが、やっぱり人手の問題があります。スタッフは少ななくても、普段から子どもたちにも開放していきたいねと話していますが、今はそこまで辿り着けていません。コロナの問題もありますので…。
木村 定期的に開催していくとなると、コロナや人手の問題は大きな課題ですね。
山本 いつも同じ場所が使えるということも重要です。
脇 公民館は、他の利用者も使っていますから、この週は、土曜日使っていないからラッキーという時もある、先に予約されたらということもあります。
木村 山本さんのように、固有の場所がある場合と、公民館など公共の場で開催する場合は違いますね。
皆さんは、色々工夫なさってこれまで活動してこられていますが、居場所を地域の中で広げていくために必要なことは何だと思われませんか。
脇 例えば、今日はスタッフの人数が集まりそうにならなかった時に、誰か手伝いに来てくれないかなど。ヘルプの声をかける場所や連絡先があったら良いなと思います。場所にしても、この場所を使えるよといったこ



行けない子どもも来ます。保護者と一緒に来る子どももいますし、保護者が連れてこられて、何時に迎えに来ますと子どもだけ参加されることもありま。友達との保護者同士で来られて、一緒に過ごされることもありま。

家でゲームをしていると怒られるという子どもたちがゲームをしたり、少しはめはずしてお行儀悪くしていたりすることもあります。自由で過ごせる場所があるといいなと思つてうにしています。

中には、きちんとごはんを食べてないかもしれないと思われる子どももいます。直接、問い詰めることはせず、少し遠巻きに、でも様子をしっかり見ています。

木村 ここに毎月来たいなあと思うような工夫は何かされてい



とが、まとまって分かるころがあったらなと思います。

木村 活動に関心がある人が、空いている時間に手伝いに来てくれたら居場所も助かりますね。何度か手伝っているうちに、今度は自分でやるうと思うことがあるかもしれません。先進的な活動をされているところで、新しい活動を始める人材を育てることも、地域の中のネットワークを作っていくことに繋がると思っています。人だけじゃなく、場所もここなら使えるよということが発信されれば、これからやろうと思つている人とマッチングできるかもしれないですね。

山本 色々な地域で居場所が増えてくると、(出かける側も)行きやすくなると思うんですね。自分の地元だと知っている人がいて行きにくいけど、違う

地域だったら行きやすいっていうのもあると思います。実際、全然違う地域の方がたくさん来られています。

木村 確かに数が増えていくと良いですね。活躍してくれる人を育てるのは、県や市で養成講座を実施するということだけでなく、今ある居場所の中に、次の担い手がいるのが理想だと思います。次の担い手、場所、後はチャンス「やってみませんか？」というふうに、社協や行政から声をかけたりすること、「じゃあ、やってみようかな」と繋がっていくこともあるのではないかと感じました。

山本 地域で何かしようとする時に、手伝ってくれるボランティアや地域の人たちはいても、運営するための核となつてコー



ディネットする人がいないと始められないのです。

木村 核となつてコーディネートできる人：難しいですね。

佐々木 やりたいと思った時、一人で全部やらなくて良いのです。もちろん、コーディネートする人も必要ですけど、最初はやりたいと思ってる人が、ちょっと勇気を出したらできることから初めて、できるようになつたら、次の活動にと、少しずつ広げていくのかなと思います。例えば、図書集まりとかも、小さい読み聞かせ会は、色々な場所ですべてあるので、何かの時にまとまって大きなイベントをするとか。山本さんのところに、私はこういう事ができるのでやらせてほしいと話をもちかけたり、ちょっとうちに来てやってよと声をかけたりと。やっていくうちに、ノウハウを身に付けて、その人が立ち立っていくという感じになるのかなと思います。



というのを見てもらって、その中で色々なことを考えてもらいたいと思います。

私たちが、最初からたくさん決まっていたのではなく、やっていると、こんな事もやっていたらいいのではないかと課題を見つけ、次はこれをやろう、その次にこれをと増やしてきました。ぜひ、足を運んでもらえたら、もっといい形で進めていけると思います。

佐々木 私たちの団体も、市から支援を受けて、協力いただいています。相談に行つて、「こういうことをやりたいんだけど、どうしたらいいの?」と聞くと、「これはこういうふうにしたらいいよ」と。ただ、なかなか聞きに行けないということもあります。私たちが行政だからと構えずに、協力をお願いすればいいと思っています。

あとは、ネットワークづくりでは、色々なところに出かけていって、私のことを知ってもらったり、「てとてとて」の活動を見てもらったりして、私でもできるかと思つてもらえたり取り組みをする役目もあると思つています。

木村 何か楽しそうな活動は、大人も参加したいし、参加して

来てるうちに、「次回、私も用意しようか」等の言葉が出てくると思つています。その広がりが大切ですよ。

佐々木 一人で全部やらなくても良くて、手伝っているうちにそれが形になっていく、そういうのが良いなと思つています。そういうネットワークができるように、市や県の方に現場に入つて、肌で感じてもらいたいのです。「この人に相談したいな」という方が、役所に増えてくださると良いなと思つています。

木村 今日のお話からも、鳴門市は密なネットワークが機能している、普段からやりとりもあります。行政と現場の間で、地



域や制度を知つていて、尚且つ、団体にも足を運べるような、そんな存在があることも、団体が継続的に運営していく上で、とても大事ななと思つています。

山本 私のところでは、保健所の許可を取つています。保健所の種類にもよりますが、許可を取つた所で、全部調理をしていくと、配膳するだけなら別のところでも大丈夫なんです。だから、保健所の許可を取つた施設が1つあれば、下ごしらえや調理をそこでやって、公民館や集会所など、どこでも開催して配膳することもできます。

木村 山本さんの所で作ったものを「てとてとて」さんのところに持つていき活動するというマッチングができるんですね。

山本 そうです。そうですね。

佐々木 これから、何かやりたいと潜在的に思つているお母さんたちに伝わると、開設するハードルが下がりますよね。

木村 このように集まつて、互にお話すると、色々な工夫やアイデアが出てきます。

金平 コーディネーターとして、各団体に個別に関わる人が多いのですが、今日のように集まつて、皆さんでお話する機会も大切ななと思つました。

も、なかなか接点がないという問題があります。

現役世代の方々は、仕事が休まず地域活動に参加できにくいとおっしゃいます。10人声をかけて、1人でも2人でも参加できれば、そこからまた広がっていくことも十分考えられます。社協として地道に続けていくお手伝いができたら良いなと思つています。

黒瀧 今日、参加されています。団体の方は、信念を持つてやられていきます。次の担い手の問題としては、恐らく、皆さん協力してくださるのですが、自分が先頭きつてやるというのではなく、ライトな参加ということかと思つています。協力はするけど、自分がするという方がなかなか生まれてこないところが課題になつていっていると思つています。そういう意味で、持続可能にしていくネットワークづくりが必要で、ノウハウを蓄積していき、これをやればできますよということが分かるようにしなければならぬと思つています。

藤原 地域に、子どものためになる活動をする大人と実践者を育てていくということは大切なことです。私自身、市役所の職員で、市社協に向向しています。



昔から職場でよく言っていたのは、「子どもがいる職員がPTAの役員を率先してやろう」と。皆なかなかやってくれないですけどね(笑)。行政と地域、学校を繋ぎながら、地域に入つていった人が行政を退職して、60歳や65歳はまだまだ若い世代です。地域を引っ張つていただけたら。行政職員は、地域や制度をよく知つているので、そういう人が参加することで、ずっと続けていけるのかなという気がします。

木村 行政や社協の方々が、居場所に来てくださる時は、見学ではなく、ぜひ手伝ってもらつたり一緒にしてもらつたりすると、より深く知つてもらえます。また、アドバイザーとなつて、手続きや交渉のお手伝いをしてもらえると、現場は心強いだろうと思つています。皆様がいかですか。

脇 行政ということを前面に出すのではなく、一緒にしてくださるといのは、本当に気持ちの面でも、知識の面からみても支えになるだろうと思つています。藤原さんだったら気安く言えるのですが…。

山本 やっぱ、現状を見てもらいたいですね。どんな状況か

でしようか。

木村 ありがとうございます。ぜひ考えてまいりたいと思つています。

本日、お話を伺ひして、居場所に来る子どもや家族が、いかに自然な形で「行ってみたいな」、「楽しそうだな」、「またここに来たいな」と思えるような場所にしていくかが、地域での子どもの居場所を推進していく上で、すごく大事だと思つました。

また、子どもの居場所を運営する次の担い手を育てること、地域における繋がりを創る重要性を改めて感じました。互いの活動を共有して、活動に参加した人にバトンを繋いでいくのか。さらに、行政や社協等、現場を繋ぐ役割を担う方々が、現場に来てくださることで、形だけではない本当のネットワークを形成できる可能性を感じました。まさに、これが子どもや家族にとって居心地の良い地域づくりにつながると思つています。

ぜひ、今後とも県や市の活動、県内の子ども居場所づくり推進に、ご協力いただけますようお願いいたします。

本日は、ありがとうございます。

子どもの居場所を運営する方々の「悩みごと」「困りごと」を

鳴門教育大学 子ども未来応援プロジェクトの大学生や大学院生が考えてみた！

県内で子ども食堂・ユニバーサルカフェ・児童クラブ・児童館・自立援助ホームなどの「子どもの居場所」に取り込まれている10団体の方々への自由記述式のアンケートには、様々な「悩みごと」「困りごと」が記されてきました。鳴門教育大学子ども未来応援プロジェクトに所属する大学生や大学院生が、解決方法や工夫について、あれこれ考えてみました。若く粗削りなアイデアは解決策とまでは言えないかもしれませんが、誰かの何かのお役に立てたらと思います。
(木村・佐々木・川村・清藤・喜馬・仁木・三谷・野見山・アグン・渡辺)

Q 子どもの居場所の周知の仕方やたくさん子どもや保護者に来てもらう方法とは？お家で一人で過ごすお子さん、お悩みや困りごとのあるご家庭に利用してもらいたい！そんな方々への誘い方など、どうすればいい？

- 保育所、幼稚園、学校、学童、児童クラブ、児童館等でチラシや招待状、チケットを配ってもらったり、校内や自治会の掲示板に「居場所だより」のようなものを掲示してもらったりする。
- 小学校の先生宛に子どもたちと作った招待状を送り、活動日に来てもらう。また学校の課外学習の一環として、居場所に見学や遊びに来てもらう。
- 宣伝用の動画（建物に入るところから、中の様子、活動の様子を、やって来る子どもの視線を意識して撮影したもの）を作成し、SNSで情報を発信したり、学校の朝の時間に流してもらったりする。
- フリーマーケットやバザー（服・本・おもちゃ・食器など）、お弁当販売、料理教室などを開催し、まずは場所を知ってもらう。
- 来ている子どもたちに、他の友達や大人の知り合いも誘って参加するよう呼びかけ、芋づる式で広げていく。
- 「たくさん」来ることも、少なくとも継続して実施していることに意味があると思う。自由に出入りができる、安心感の持てる環境にする。

大学でもお手伝いできます！
子どもたちと一緒に招待状づくり/居場所のショートムービーづくり/居場所の看板づくり

Q 活動を継続していくためには、資金と同時に一緒に活動を手伝ってくれるスタッフが必要です。ボランティアに来てくれるスタッフと居場所を繋ぐ方法は？

- 大学や専門学校、高等学校にボランティア活動の募集をする。学校の入学式後のオリエンテーションなどで、ボランティアの説明をする時間を作ってもらう。
- 地域の自治会などにも声をかけて高齢者のコミュニティと連携する。
- ポスター、チラシ、ホームページ、SNSなどの活用も良いが、人と人の繋がりを生かし、ボランティアとして来ている人に、さらに人を連れてきてもらう。
- 子どもと一緒に来られた保護者などに声をかけ、簡単なお手伝いをしてもらったり、次回も会えることを楽しみにしていると伝える。自然と手伝ってくれる人を増やす。
- ボランティアに行く学生の中には、集団になじみにくい学生も少なくない。初めは役割を指示してもらえたり、ボランティア同士が仲間づくりをできる仕掛けがあったりすると安心でき、継続しやすい。
- ボランティアに来た学生に、友達も連れてきてもらう。
- 地域の子どもの食堂や居場所そのものと、そこに関係する人が、メーリングリストやアプリのような集約的にアクセスできるものがあって、参加形態（運営者、調理、ボランティア、利用者等）を選ぶことができ、それぞれに必要な情報がまとまっているものが作れるといい。例えばボランティアとしてアプリに登録すれば、活動やイベントの場所や日時が通知され、その日の思い付きで行ける、など。

大学でもお手伝いできます！
学生ボランティアの募集
居場所の案内やチラシの学内掲示
大学での案内

Q 子ども自身が考え、自由に過ごすことを大事にしたいのですが、保護者や周りの大人の指図や注意が気になります。

- 運営者がこういう方針で関わりたいと考えていることを、事前に伝えたり、お便りなどに載せて発信したりする。
- 周りの大人の考えも一つのアイデアだと思うので、子どもの選択肢が広がると考え、様々な価値観を排除せず、受け入れる。
- して欲しい関わりのモデルを示して見せる。大学生のボランティアにあらかじめ関わりの方針を伝え、良いモデルの人が目につきやすいように増やす。
- 「〇〇さん、ここ手伝ってもらえますかー」と仕事をお願いし、「もうホンマに助かります」と言って一緒に動く。
- 子どもの自由を大切に、大人の介入を避けたいときは子どもと大人の過ごす場所を決めて分けておく。
- 保護者とスタッフが世間話をする時間を設けることで、子どもの自由な時間を増やす。
- この居場所は「こうあるべき」と決めてしまうと、大人も子どもも窮屈になるので、温かく楽しい雰囲気を作って、思いが周囲にゆっくり浸透していくのを待つ。

大学でもお手伝いできます！
大学生のボランティアは、子どもたちを尊重し関わることを大切に考えています。ぜひお声かけください。

こんなルールどうですか？

子どもの居場所ルール

ルール① お互いを尊重する Don't disturb people.	ルール② 自分を大切にする Don't hurt yourself.	ルール③ 相手を大切にする Don't hurt others.
---	--	--

Q 子どものパニック(自分や他人・物への乱暴な言動や大きな声を出すなど)が起きたとき、どうしたらいい？

- 冷やかな視線を向けられないように、「〇〇ちゃん、どうしたんね？」と明るく聞きながら、別室に連れて行き、落ち着いてから戻るようにする。
- ワールドダウンできる場所を用意しておき、そこに移動したり、危険なものを遠ざけたりする。自傷や他害が起こらないように十分注意する。
- 叫んだその時は、その状態を否定せず、受け止め寄り添う関わりをし、子どもたちの間で何が起きているかよく観察する。
- 他の子どもたちが差別的な目で見たり、驚いたりしないよう、スタッフの態度にも気を付ける（慌てたり、好ましくない表情をしたりなどしない）。
- 周囲の参加者やスタッフの声、身体接触（腕をつかむ・抱く）が更なる刺激にならないよう配慮する。
- 日頃からパニックやハプニングが起きたときの具体的な対処と役割分担を決め、スタッフで共有しておく。
- 何がきっかけや要因になっているのか状況を振り返り、パニックが起こらない環境をつくる。

大学でもお手伝いできます！
鳴門教育大学「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」を利用して、無料で大学教員に相談することもできます。お気軽に相談を！
<https://www.naruto-u.ac.jp/research/05/001.html>

鳴門教育大学 子ども未来応援プロジェクト

将来教員や学校関係の現場で働くことを目指している学生が多い本学において、「子どもの貧困」「子どもの居場所づくり」など子どもの実情について理解を深め、子どもたちの声に耳を傾け、すべての子どもが子どもらしく未来に向けて力強く歩きだせるように、自分たちに何ができるのか、学校に何ができるのか、社会に何ができるのかを考え、活動しています。県内の子どもの居場所にボランティアとして参加させていただいたり、県、市や県社会福祉協議会と連携し、子どもの居場所づくり推進や子どもの貧困対策に参画したりしています。何かお手伝いできることやご相談があれば、お声がけください。



連絡先：
鳴門教育大学 木村直子
nkimura@naruto-u.ac.jp

ボランティアを継続している理由を教えてください。

辞めたいのはどんなとき？

- 自分の無力さを感じたとき
- 他のお子さんがいじめられているとき
- 自分のお子さんを肯定的に捉えられていないと感じたとき
- 負担が大きくなってきたとき・拘束時間が長いとき
- 少人数ですがこんな意見も...
- ボランティアを継続している理由を教えてください。
- そこに来ている子どもたちが好きだから・子どもが可愛いから
- 子どもが好きだから・子どもたちと遊ぶことが楽しいから
- 将来に役立つから・気分転換になるから
- 私が来ていることを喜んでくれたり、まだ帰らんとって一言してくれることが嬉しいから
- 行くと子どもたちと仲良くなれるから
- 楽しい時間を過ごせるから
- 続けていけば、色々見えてきて楽しくなるから
- 関係ができてきて、その人のためにも頑張ろうという気持ちになるから
- 続けられるほど自分自身の居場所になり変わっていくから
- 自分にとってプラスになることが多いから
- 自分の視野が広がったり、自分の学びに繋がったりするから
- 新しいことを学ぶことが楽しいから

緊急学生アンケート

また行きたくなるボランティアってどんな場所？

ボランティアに参加することになったきっかけは何ですか(複数回答可)

● チラシや案内を見て	● SNSやHPなどネット情報を見て	● 学校の先生からの紹介で	● 友達に誘われて	● ボランティア先の人から直接誘われて	● 授業の一環で	● サークルやクラブ活動の一環で	● その他
-------------	--------------------	---------------	-----------	---------------------	----------	------------------	-------

大学生らは、大学や教員、友人からの紹介、ボランティア先の人に誘われるなど、人と人の繋がりがきっかけとなる人が多いようです。



東みよし町

社協の取り組み

社会福祉法人東みよし町社会福祉協議会が開催する、夏休みの子どもの居場所「こども★さろん」に賛同し、ボランティアとして関わってくださっている4名の方の取材に伺いました。



しましまなり 島 昌成さん



かどう 加藤 公夫さん



いない みおこ 稲井 美緒子さん



しもおか くにとし 下岡 邦敏さん

オブザーバー 東みよし町社会福祉協議会 課長 榎尾 健二さん
主事(生活支援コーディネーター) 井原 仁美さん
地域支援事業推進員 中尾山 裕介さん

子ども一人ひとりの豊かな福祉観の育成を地域で見守る



▲東みよし町社協 課長 榎尾 健二さんを交えての取材模様

「こども★さろん」は、夏のプールでの子どもたちの居場所づくりを目的に、平成28年に始まりました。午前は学習支援、紙芝居・読み聞かせ、昔遊び・ものづくり。昼食は、「ボランティアア愛」さんが調理してくれた料理。(冷やし中華やおにぎり、サラダなど、健康を考え

た子どもたちが喜ぶメニュー)午後は管理プールで水遊びというプログラムです。(今年度は1回のみ開催)

今回取材に伺った民生委員児童委員協議会所属の島さんと加藤さんは、イベント時は主にプール監視員をして、子どもを見守っています。

日頃から一人ひとりに関わる

普段から地域の子どもたちの見守りを行っている島さんは、「目と目を合わせて直接会って話すことをポリシーにしています。」と話されます。

月4、10回、登下校時の立哨

をされている加藤さんは、「普段接しているから挨拶するとハッピーなことも分かります。」と笑顔で話されます。民生委員・児童委員のお二人は、普段から子どもたちと接しているからこそ、苦楽も分かる存在となっているようです。

これからの子どもたちとの関わりについて尋ねると、「地域の子どもが農業体験をできるようにしたい。」という島さん。「こども★さろんで畑を使わせて欲しい。」と加藤さんも話されます。地域ののお年寄りが中心となって、地域で子どもにも農業を教える。昔は地域にそのような人がたくさんいました。地域の大人とふれあひながら、子どもに昔のような体験をさせてあげたいと優しいまなざしで語ってくれました。

子どもたちの居場所づくりに関わることで地域の仲間づくりをすすめる

「こども★さろん」を始めるきっかけとなったのは、東みよし町児童公園プールの近くに昼間老人憩いの家があり、そこで地域の子どもと共に活動や交流をする機会として設けられました。「ネーミングは、すでに高齢者の活動名「さろん」と、子どもと一緒に交流するという意

味で間に星を入れて「こども★さろん」となりました。「これらのコーディネートがされた東みよし町社会福祉協議会の榎尾課長は、プールだけではなくいろいろな活動体験ができる場にしたいと考え、そのときに地域で多世代交流に取り組んでいる『グランマ』会長の稲井さんと、『東みよし町老人クラブ連合会』若手部長の下岡さんにも声をかけられました。お二人とも『退職校長会』に所属されている元校長先生で、「プールに子どもたちを呼んで学習支援」という社協からの案に賛同し、一緒にやれるならと活動に参加されました。

稲井さんは3年前から、様々な才能のある元気な9人のグループ「グランマ」を結成し活動をされています。テーマを決めて大きなオリジナルの紙芝居を作り、主に幼稚園や小学校で読み聞かせを行っています。さ



▲稲井 美緒子さんと下岡 邦敏さん

らにご自宅の古い家を『グランマハウス』として解放されており、毎月1回、何もなくても開催する定例会は、みんなの聞いて聞いている場所になっているそうです。「今一番多い話題はこの病院がいい?(笑)共通テーマの話は尽きないです。」と稲井さん。「子どもの居場所づくりのための活動と聞いていますが、仲間と一緒にやれることと集える場所があること。それが今は自分の居場所になり、子どもから高齢者までが共に過ごすことのできる居場所にもなっています。」と話されました。子どもの居場所に取り組むことで大人たちが集い、大人たちが集うことで、子どもたちも安心して活動でき、またその家族の安心感にも繋がっているようです。

「創設当時は老人クラブの方々のために始めた」という下岡さん。「2年間だけですよとの約束で事務局をも引き受けて、今は自分のためにしています。苦ではない(笑)」とのこと。「勧められた馬には乗ってみよ。ということわざがあります。地域の中に入ると、そこに暮らす子どもたちのことが分かる。それが生きがいです。」と、下岡さんにとっての居場所の存在について深い思いを聞くことができました。

稲井さんと下岡さんの共通の理想は昔、ガキ大将がいたころの神社での遊び「今は遊ぶためにお金がかかって、親が遊びに手をかけすぎているように感じます。場所に合った遊び方を、自主的に子どもたちが考えることが理想で、それが、子どもたちの力を引き出すのではないかと思います。」子どもたちだけで遊んでいるように見えて、周りの大人たちがそっといい環境を作ってくれます。そんな心遣いを通じて地域がまとまります。子どもの居場所は地域の居場所。子どもが動けば大人も動く。これからも活動を続けていきたいと、4人の方の思いを聞くことができました。

今日、取材にご協力いただいた4名の方からは「東みよし町社会福祉協議会が地域のリーダー。地域で活動する団体がサブリーターとしてスムーズに機能しています。」と話してくれました。将来を担う子ども一人ひとりの豊かな福祉観の育成には幼少期からの地域の大人や他者との関わりが欠かせません。そのことを、地域の様々な立場の大人が共有し、地域の居場所として子どもを地域で見守りあっています。東みよし町社協の取り組みは、とても活気がありました。

「子どもの居場所」づくりの推進に向けた取り組みについて

社会福祉法人徳島県社会福祉協議会では、人と人、人と社会がつながり、一人ひとりが生きがいや役割を持ち、互いに助け合いつながりながら暮らしていくことのできる地域共生社会の実現に向けた取り組みを進めています。

①子どもの居場所づくりに関する相談窓口の設置

令和元年9月から、子どもの居場所づくり推進コーディネーター12名を配置し、各地域での「子どもの居場所」の取り組みや、活用可能な社会資源の情報を提供する相談窓口を設置しています。

引き続き、各種「子どもの居場所」の事業運営者や、新たに取り組みを希望する方、さらに「子どもの居場所」を応援したい個人・団体の相談に対応するとともに、交流の機会を提供してまいります。

②広域的な支援バンクの充実

子どもたちに居場所を提供する様々な活動の充実を図るため、市町村等で活動を行っている

「子どもの居場所」づくりの取り組みを推進するため、活動に関わる情報を、「子どもの居場所づくり応援サイト」ホームページやSNS等で発信しています。

④広報周知

「子どもの居場所」づくりについて、県内の実施状況や支援団体の実態等を記載した啓発パネルやリーフレット等を作成しています。啓発パネルの貸し出しや、リーフレット等のデータの提供も行っています。

⑤講座等の実施

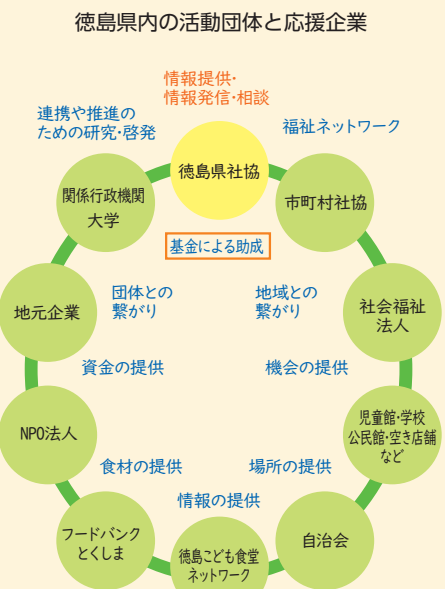
「子どもの居場所」について、啓発パネルやリーフレット等を活用し、講座を実施しています。

⑥「ぐんぐん」子ども居場所の創設

県内の篤志家からのご寄付により、令和元年12月、本会にとくしま子どもの居場所づくり推進

進基金を設置しました。本基金は、「子どもの居場所」の確保や、地域で子どもたちを見守り育む事業に取り組まれる団体を対象に助成を行い、子

どもたちが安心して参加できる「子どもの居場所」づくりの拡充を図ることを目的としています。



助成団体の募集

- 募集期間 11月中旬から1月末頃
- 助成対象 徳島県内において、「子どもの居場所」の取り組みを実施予定の団体
- 助成金額 (1) 開設経費 上限20万円 (2) 運営経費 上限24万円 (2万円/月)

- 応募方法 事業実施地域の市町村社会福祉協議会を通じて応募
- 選考方法 当会が委嘱する運営委員会にて審査・選考を行います。

※その他、詳細については、「とくしま子どもの居場所づくり応援サイト」を御覧ください。





黒崎地区女性会

事業名 ● みんなで集う！子どもふれあい食堂
 所在地 ● 〒772-0001 鳴門市撫養町黒崎字清水52-1 黒崎集会所内
 代表名 ● 富田 妙子
 種別 ● 子ども食堂・多世代交流
 開催日 ● 毎月1回(年間12回)土曜日 黒崎集会所
 時間 ● 10:00~15:00
 費用 ● 無料

なるとにしてとて

事業名 ● こどもふれあいひろば
 所在地 ● 〒772-0051 鳴門市鳴門町高島字北86 鳴門公民館
 代表名 ● 佐々木 由紀
 種別 ● 学習支援・多世代交流
 開催日 ● 第4日曜日
 時間 ● 10:00~12:00
 費用 ● 無料

社会福祉法人 共生会

事業名 ● ユニバーサルカフェ「きららカフェ」
 所在地 ● 〒771-1610 阿波市市場町香美字西原245番
 代表名 ● 原 照代
 種別 ● 子ども食堂
 開催日 ● 毎月1回(土曜日)年間12回
 時間 ● 11:00~15:00
 費用 ● 有(幼児~中学生は無料/高校生以上・大人500円)

新開放課後 子ども教室 ポコ

事業名 ● 新開放課後子ども教室 ポコ
 所在地 ● 〒773-0022 小松島市大林町金島3-12
 代表名 ● 山本 純
 種別 ● 学習支援・体験学習
 開催日 ● 毎週1回(木曜日15:00~18:00)
 開催日 ● 月1回、食育イベント、交流イベント 環境学習等
 費用 ● 有(スポーツ安全保険料 おやつ代)



令和2年度

「とくしま子どもの居場所づくり推進基金」 交付団体一覧

子どもの居場所について

「子どもの居場所」の定義

「子どもの居場所」とは、地域の大人との継続的な交流ができる、子どもたちにとって安全で安心な居場所であり、信頼関係のもとでの様々な活動を行う中で、すべての子どもたちが夢や希望をもって健やかに成長していける場である。

原則として、18歳に満たないすべての子どもや家庭を、地域で見守る子どもたちの居場所である。

(『徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドライン」令和元年5月29日策定)

● とくしま子どもの居場所づくり推進基金

県内の篤志家からのご寄付により、令和元年12月、県社会福祉協議会に「とくしま子どもの居場所づくり推進基金」を設置しました。

本基金は、「子どもの居場所」の確保や、地域で子どもたちを見守り、育む事業に取り組みされる団体を対象に助成を行い、子どもたちが安心して参加できる「子どもの居場所」づくりの拡充を図ることを目的としています。

令和2年度の基金交付団体は17団体です。

東部地域 西部地域 南部地域



こどもmoおとなmo Wi-Wi 食堂

事業名 ● こどもmoおとなmoWi-Wi 食堂
 所在地 ● 〒778-0002 三好市池田町マチ2175
 代表名 ● 住吉 千恵美
 種別 ● 子ども食堂・学習支援・多世代交流
 開催日 ● 毎月第4水曜日(12月第3水曜日)
 時間 ● 16:30~19:00
 費用 ● 有(子ども100円/大人500円)

夏子いなか市 管理運営協議会

事業名 ● 子育てサロン夏子
 所在地 ● 〒779-3744 美馬市脇町西俣名2585-11
 代表名 ● 正木 恵子
 種別 ● 子ども食堂・学習支援(体験)
 開催日 ● 毎月第3日曜日(実施予定)
 時間 ● 9:30~15:00
 費用 ● 有(子ども無料/高校生以上は500円)

Nagomi ラボ

事業名 ● 和みプラザ活用によるラボ活動
 所在地 ● 〒779-3233 名西郡石井町石井字石井266
 代表名 ● 安達 和美
 種別 ● 学習支援(リアル&ZOOM活用) 地域と繋がる学び企画と実践
 開催日 ● 月1回(年間12回程度)
 時間 ● 開催時に決定
 費用 ● 有(中学生以上 実施内容・年齢により金額異)

クレエール 子ども食堂

事業名 ● 子ども食堂ユニバーサルカフェ ダイバーシティ推進拠点
 所在地 ● 〒770-0941 徳島市万代町5丁目71-4
 代表名 ● 原田 昭仁
 種別 ● 子ども食堂
 開催日 ● 平日毎日11:30~18:00 第4土曜日10:00~14:00
 費用 ● 子ども(大学生まで)無料/大人500円

いきいき安心移動 こども食堂

事業名 ● こども食堂及び居場所づくり
 所在地 ● 〒770-0942 徳島市昭和町3丁目35-2 ヒューマンわーくびあ徳島105
 代表名 ● 清田 麻利子
 種別 ● 子ども食堂
 開催日 ● 月1回程度
 時間 ● キッチンカーで県内の必要とされる場所で開催する。
 費用 ● 子ども無料/大人300円

四つ葉

事業名 ● 移動する居場所カフェ
 所在地 ● 〒770-0027 徳島市佐古七番町4-9
 代表名 ● 神山 純子
 種別 ● 子ども食堂
 開催日 ● 週3回開催
 時間 ● 平日15:00~17:00、休日12:00~18:00
 費用 ● 子ども無料



あまべの杜

事業名 ● おばあちゃんのウチごはん
 所在地 ● 〒775-0202 海部郡海陽町四方原字旭町8の6番地
 代表名 ● 笠原 まり
 種別 ● 子ども食堂・多世代交流
 開催日 ● 土日長期休業中、月平均8回以上
 時間 ● 12:00~13:30、19:00~20:30
 費用 ● 有(昼500円/夜600円) ※量多し

こどもっとからふる

事業名 ● 子育て支援活動
 所在地 ● 〒774-0043 阿南市柳島町并財天西一丁目
 代表名 ● 吉本 真菜実
 種別 ● フリースクール、多世代交流
 開催日 ● 毎週月曜日(月4回)
 時間 ● 10:00~14:00
 費用 ● 有(子ども無料/大人200円)

友愛クラブ「ともしび」

事業名 ● 子どもたちの居場所 ユニバーサルカフェ コミュニティはうすTUDO!
 所在地 ● 〒772-0031 鳴門市大津町木津野字内田7番地10
 代表名 ● 太田 晴清
 開催日 ● 学習支援/第2・4木曜日(月2回)/15:00~17:00
 開催日 ● 子ども食堂/毎月第1・第3土曜日(月2回)/11:00~13:00
 費用 ● 軽食代、おやつ代は実費負担

社会福祉法人 あさがお福祉会

事業名 ● Tsuda-Machi-Kitchen ユニバーサルカフェ
 所在地 ● 〒770-8012 徳島市大原町外籠38番地(法人本部)
 代表名 ● 保岡 正治
 開催日 ● 子ども食堂/毎月1回(年12回)/17:00~18:30
 イベント/毎月1回(年12回)/14:30~15:30
 費用 ● 子ども無料

料理学習 つむぎ

事業名 ● 料理学習 つむぎ
 所在地 ● 〒770-0051 徳島市北島田町1丁目98-10
 代表名 ● 大杉 麻弥
 種別 ● 子ども食堂・学習支援(体験)
 開催日 ● コミュニティセンターで年間14回開催(予定)
 時間 ● 9:30~12:00
 費用 ● 子ども無料

料理学習 つむぎ

代表/大杉 麻弥 所在地 徳島市北島田町1丁目98-10
電話番号 090-4506-0667



- 目的** (地域課題等を含む) ● 体験・経験からスタートする子ども食堂 × 学習の居場所づくり
- 期待する効果** ● 料理を通して身近になる 5 教科
算数だけでも数・量・分数・単位・数え上げ・図形・掛け算・割り算
算数力アップの学習 × 料理
- 実施方法** ● 「子ども食堂」での料理教室及び学習を行う。子どもは参加無料。
(頻度・回数・時間) また、高校生や大学生のボランティアを募り、学習支援の場も設ける。
(場所・内容・工夫点など) 配慮を必要とする参加者や家族からの相談があった場合には、必要な支援に結び付けるよう関係機関と連携を図る。
コミュニティセンターで年間 14 回開催 (予定)
- 実施体制** ● 現場責任者兼料理講師: 大杉 麻弥
(責任者・スタッフ人数など) スタッフ 4 人: 調理補助 2 名、学習ボランティア 2 名
- 周知方法** ● チラシを配布 教育委員会・近隣保育園、幼稚園、小学校、
SNS で告知
- 参加対象** (年代・人数など) ● 1 回当たり参加者数 (※見込み数)
子ども 15 名 (未就学児 5 名、小学生 10 名) 大人 5 名
- 費用徴収の有無** ● 無 有 (高校生以上は 500 円)
- 安全管理・事故対応の方法** ● 安全管理マニュアルを作成し、マニュアルに基づいた対応を行う。
- 衛生管理の方法** ● 万が一の事態に備え、ボランティア行事用保険に加入。



こどもっとからふる

代表/吉本 真菜実 所在地 阿南市柳島町弁財天西一丁目
電話番号 090-7582-8327

- 目的** (地域課題等を含む) ● 子育ての悩みを気軽に話したり、情報交換をしたりする場所が少ないことや、地域の支え合いの中で子育てを協力しあえる環境が少ないという状況を改善する。
- 期待する効果** ● 地域交流に繋がり、様々な人が子育てに関わることで社会全体での子育てを応援する場になるとともに、地域共生社会実現のための、ひとつのコミュニティスペースとしての活用が期待できる。
- 実施方法** ● 毎週月曜日午前 10 時～午後 2 時 (月 4 回)
(頻度・回数・時間) 未就学児とその保護者及び不登校の児童、また地域のボランティアの交流の場として拠点となる「べんざいてんのいえ」を開放し、季節の手仕事やクラフトなどを行い、自由な時間を過ごす。
(場所・内容・工夫点など) ・月 1 回
だれもが今の自分を大事にできる時間「聴き合う場」を開催。
・月 1 回
親の勉強会 (テーマはその都度決定)
- 実施体制** ● 現場責任者: 1 名
(責任者・スタッフ人数など) スタッフ: 2 名 (託児: 1 名、ボランティア 1 名)
- 周知方法** ● SNS や地域の情報掲示板など
- 参加対象** (年代・人数など) ● 子育て中の親子及び小中学生 (親子 5 組 10 人程度)
- 費用徴収の有無** ● 無 有 (大人 200 円/子ども無料)
- 安全管理・事故対応・衛生管理の方法** ● 安全管理マニュアルを作成し、マニュアルに基づいた対応を行う。



友愛クラブ「ともしび」 ユニバーサルカフェ「コミュニティはうすTSUDOI」

代表/太田 晴清 所在地 鳴門市大津町木津野字内田7番地10
電話番号 088-685-6177

- 目的** (地域課題等を含む) ● 少子化社会における児童の健全育成及び、児童にとって安心安全なコミュニティづくりを推進するため、児童生徒に対する学習支援事業並びに食事の提供事業を保護者負担無しで実施するため「子どもたちの居場所」として、2008年6月28日から第一小学校前に開設。児童福祉の向上と地域福祉の向上に寄与すること。
- 期待する効果** ● 今日、地域社会において、「児童並びに保護者にとって、安全で安心できるコミュニティの必要性」が求められており、関係者の理解と協力が深まることによって「地域の福祉」を高める。
- 実施方法** ● 学習支援事業及び食事提供事業の実施場所
(頻度・回数・時間) ユニバーサルカフェ コミュニティはうす TSUDOI
(場所・内容・工夫点など)
- | | | |
|--------|------|--------------------------------------|
| 学習支援事業 | 開設目的 | 第一小学校区児童に対する宿題のサポート等 |
| | 開設日 | 第 2・4 木曜日 (月 2 回) 午後 3 時～午後 5 時 |
| | 対象児童 | 概ね 10 名程度 |
| 食事提供事業 | 開設目的 | 第一小学校区児童に対する昼食の食事支援 |
| | 開設日 | 毎月第 1・第 3 土曜日 (月 2 回) 午前 11 時～午後 1 時 |
| | 対象児童 | 概ね 10 名程度 |
- 実施体制** ● 現場責任者 太田 晴清
(責任者・スタッフ人数など) スタッフ 3 人: 学習支援担当 1 名、食事提供担当者 2 名
- 周知方法** ● 徳島新聞地区専売所発行の行事案内で周知。
- 参加対象** (年代・人数など) ● 1 回当たりの参加者数
児童 10 名 大人 3 名
- 費用徴収の有無** ● 無 有 (軽食代、おやつ代は、実費負担)
- 安全管理・事故対応の方法** ● 安全管理マニュアルを作成し、マニュアルに基づいた対応を行う。
- 衛生管理の方法** ● 万が一の事態に備えてボランティア行事用保険に加入。



社会福祉法人 共生会 ユニバーサルカフェ「きららカフェ」

代表/原 照代 所在地 阿波市市場町香美字西原245番
電話番号 0883-36-6660

- 目的** (地域課題等を含む) ● 子どもが主人公になる居場所づくり (地域の人々と交流できる機会の提供)
- 期待する効果** ● 様々な支援を必要とする子どもたち (生活困窮世帯・ひとり親家族・虐待のある家庭・引きこもりの子ども等) に対して、食事の提供や遊びや体験等が経験できるイベントへの参加、学習支援、だんらんの場を提供させていただくことで、子どもたちの地域での居場所ができる。
・子どもたちの生活面や学習面での支援が可能となり、様々な機関と連携し子どもたちをサポートでき様々な問題の負の連鎖を防ぐセーフティネットとなる。
- 実施方法** ● 【実施内容・工夫点】
(頻度・回数・時間) ① 子ども食堂の開催 (食事の提供: 中学生までは無料、高校生以上は 500 円)
(場所・内容・工夫点など) ② クッキング体験や遊びコーナー等イベント開催
③ 大学生等のボランティアを募り、子どもたちの食事・遊び・学習をサポート。
④ 配慮が必要な子どもの参加や家族からの相談があった場合には、関係機関担当者の参加に頼りサポート連携体制を図る。
- ・【実施場所・時間・回数】
・場所: きららカフェ (阿波市市場町香美字渡 10-1)
・時間: 午前 11 時～午後 3 時
・回数: 毎月 1 回 (土曜日) 年間 12 回
- | | |
|------------------|--------------------|
| 4 月 地域交流会 (創立記念) | 10 月 地域交流会 (ハロウィン) |
| 5 月 母の日フェア | 11 月 オータムフェア |
| 6 月 父の日フェア | 12 月 クリスマスフェア |
| 7 月 サマーフェア | 1 月 ウィンターフェア |
| 8 月 夏休みフェア | 2 月 バレンタインフェア |
| 9 月 敬老の日フェア | 3 月 ホワイトデーフェア |
- 実施体制** ● 現場責任者 前田 裕子
(責任者・スタッフ人数など) スタッフ 5 名: 調理 1 名、提供担当 1 名、学生ボランティア 3 名
- 周知方法** ● チラシの配布 (阿波市・吉野川市の児童支援事業所、放課後児童クラブなど)
- 参加対象** (年代・人数など) ● 幼児～中学生: 15 名、高校生以上・大人: 10 名
- 安全管理・事故対応の方法** ● 既存の安全管理・事故対応マニュアルに基づいた対応を行います。
- 衛生管理の方法** ● 総合共済賠償保険に加入。(食中毒等の発生に伴う補償等)





特定非営利活動法人 フードバンクとくしま

〒770-0942
徳島市昭和町3丁目35-2
労働福祉会館ヒューマンわーくぴあ徳島 105
電話：088-679-1919
ファクシミリ：088-679-1920
特定非営利活動法人 フードバンクとくしま
URL：https://foodbank.roukyou.gr.jp/?doing_wp_cron=1606980548.0700559616088867187500



徳島子ども食堂ネットワーク

〒770-0942
徳島市昭和町3丁目35-2
労働福祉会館ヒューマンわーくぴあ徳島 105
徳島子ども食堂ネットワーク
(事務局：特定非営利活動法人フードバンクとくしま)
電話：088-679-1919
ファクシミリ：088-679-1920



徳島県教育委員会

〒770-8570
徳島市万代町1丁目1番地
徳島県教育委員会
URL：https://www.pref.tokushima.lg.jp/kenseijoho/soshiki/kyoiku/



●徳島県教育委員会生涯学習課

「とくしま親なびプログラム集」保護者版
URL：https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippannokata/kyoiku/shogaigakushu/5037671/



「とくしま親なびプログラム集」中学生・次世代版
URL：https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippannokata/kyoiku/shogaigakushu/5037671/



とくしま 子どもの居場所づくり 応援サイト

〒770-0943
徳島市中昭和町1丁目2番地 県立総合福祉センター 3F

徳島県社会福祉協議会
地域福祉課
子どもの居場所づくり推進担当
電話：088-654-4461
ファクシミリ：088-654-9250

とくしま子どもの居場所づくり応援サイト
URL：https://t-ibasyo.com/



一般財団法人 チャイルドライフサポートとくしま

事業案内

- ◆公益法人等への助成事業
チャイルドライフサポートとくしまの助成事業は、公益法人、NPO法人等が実施する公益事業の活動資金の助成です。毎年、当財団の事業計画により決定した財源をもとに助成先団体の募集をおこない、当財団内で選考し、助成先として決定した団体に対して助成金として交付します。
- ◆子どもの自立に関する支援
社会で人と人が関わりながら生きていくために欠かせないコミュニケーションをはじめ、社会技能(ソーシャルスキル)を様々なことを体験しながら習得できるよう企画および運営をおこなってまいります。

〒779-0113
板野郡板野町黒谷宇東原33番地 5
電話：088-679-1707
ファクシミリ：088-679-1708
URL：https://cls-tokushima.org/



国立大学法人 鳴門教育大学 (鳴門教育大学子ども未来応援プロジェクト)

〒772-8502
鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地
国立大学法人鳴門教育大学
電話：088-687-6000 (代表)
URL：https://www.naruto-u.ac.jp/



社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会

〒770-0943
徳島市中昭和町1丁目2番地
県立総合福祉センター 3F
徳島県社会福祉協議会
電話：088-654-4461
ファクシミリ：088-654-9250
URL：https://fukushi-tokushima.or.jp/
徳島県保育士・保育所支援センター
URL：https://hoikujira.jp/



市町村社会福祉協議会

徳島の市町村社協
URL：https://fukushi-tokushima.or.jp/kenshakyo/shakyoist/



徳島県

〒770-8570
徳島市万代町1丁目1番地
徳島県未来創生文化部
次世代育成・青少年課子ども未来応援室
電話：088-621-2715
ファクシミリ：088-621-2843
県ホームページ
URL：https://www.pref.tokushima.lg.jp/
「徳島県社会福祉施設等名簿」などの情報を提供しています。



徳島県はぐくみ支援ポータルサイト
とくしまはぐくみネット
URL：https://www.tokushima-hagukumi.net/



市町村 (福祉相談窓口等)

徳島県の市町村一覧
URL：https://www.pref.tokushima.lg.jp/kenseijoho/kanrennochiiki/shichouson



1 目的

このガイドラインは、徳島県における民間主導により展開する「子どもの居場所」づくりの取組みを各地域に広げるため、県民、関係団体、県及び市町村が連携・協力し、持続可能な運営とする仕組みをつくることを目的とする。

2 「子どもの居場所」の定義

「子どもの居場所」とは、地域の大人との継続的な交流ができる、子どもたちにとって安全で安心な居場所であり、信頼関係のもとでの様々な活動を行う中で、すべての子どもたちが夢や希望をもって健やかに成長していける場である。

原則として、18歳に満たないすべての子どもや家庭を、地域で見守る子どもたちの居場所である。

- ①民間主導で進められる「子どもの居場所」
- ・無料または安価で栄養バランスの良い食事や温かな団らんを提供する子ども食堂・ユニバーサルカフェなど誰もが参加できるもの
- ・子ども会、青少年活動団体、プレイパークなど
- ②子どもたちの放課後の生活を支える施策
- 放課後児童クラブ、放課後子供教室、地域未来塾、児童館、子どもの生活・学習支援事業など
- ③その他、地域の実情に合わせた多様な「子どもの居場所」

3 「子どもの居場所」の機能・役割

- ①地域の中での「子どもの居場所」
- ・「子どもの居場所」は、子どもの人権に

十分に配慮し、子ども一人ひとりの人格を尊重し、子どもに影響がある事柄に関して、子どもが意見を述べ参加できるようにする。

子どもたちに、安心できる居場所を提供し、地域で見守りを行う。

子どもが遊び、学習活動及び読書活動などを自主的に行える環境を整え、必要な支援を行う。

- ②日常生活支援
- ①子どもの健やかな成長と健康を保障する
- ・食事や学習、会話、レクリエーション活動を通して生活習慣を身に付けたら、周囲の人との関わる力を身に付ける。
- ・信頼できる大人と活動をとることで、自信や意欲、自己肯定感など心理的な安定をはかる。
- ・「子どもの居場所」が子どもたちにとって安心できる真の居場所となるよう努める。
- ②社会のルール等を身につける
- ・年齢の違う子どもたちと一緒に遊ぶ機会を提供し、子どもたちが集団で一緒に過ごす中で、協力及び分担や決まりごと等の必要性を理解し、主体的に行動できるようにする。
- ・手洗いやうがい、持ち物の管理や整理整頓等の基本的な生活習慣が身に付くように支援する。
- ・子どもたちが自分たちで活動を計画したり実行したりする機会をつくり、子どもの自主性や意欲が高められるよう支援する。
- ・子どもの年齢に応じて、子どもたち自身が調理をする機会をつくり、自分で調理ができるようにする。

- ③共食機会の確保
- ・子どもの孤食や欠食を防ぎ、地域の人々と一緒に食事を楽しむ団らんの機会を提供する。
- ③保護者の子育て支援
- ・仕事などにより時間的に余裕がない保護者に、少しでも子どもと向き合う時間を持ってもらえる工夫を行う。
- ・子育て等について保護者が相談しやすい

雰囲気づくりを心掛ける。

・仕事などで家庭にいない保護者が安心できるよう、家庭で子どもだけで過ごす時間が少なくなるよう工夫を行う。

④配慮を必要とする子どもへの対応

・家庭に事情のある子どもの地域における見守りの場として、子どもがより参加できるよう、関係機関や地域などと連携する。

・子どもや家庭状況について特別な支援が必要であることの早期発見に努め、把握した場合は、市町村・福祉事務所・児童相談所などの行政機関につなぐ等の対応を行う。

- ⑤地域の人々と交流できる機会の提供
- ①遊び、学び、触れ合い
- ・製作活動や伝承遊び、地域の文化にふれる体験等の多様な活動や遊びを工夫する。
- ・子どもが身近なテーマを学び、学ぶことの楽しさを感じる機会を提供する。
- ・地域の人たちと一緒に遊んだり、食卓を囲んだりして、交流を深める。
- ・保護者や学校、地域の人たちに活動について理解を深めてもらうため、活動や行事に参加する機会を設ける。
- ②食育
- ・食事を提供する場合は、栄養バランスを考慮する。
- ・自分で調理をすることで、行事食や郷土料理、地産地消、フードロスなどについて知る機会を提供する。
- ・食文化について知るなど豊かな食を育む機会を提供する。

- ④安全管理・ケガの予防（マニュアルの整備、保険加入）
- ・運営者は、事故やケガの防止に向けた対策や発生時の対応に関するマニュアルを作成する。
- ・運営者は、開設時間中は、現場に常時、責任者を配置する。
- ・運営者は、「子どもの居場所」の安全・安心を高め、様々なリスクに備え、損害

4 子どもの安全対策・衛生管理など

- ①安全管理・ケガの予防（マニュアルの整備、保険加入）
- ・運営者は、事故やケガの防止に向けた対策や発生時の対応に関するマニュアルを作成する。
- ・運営者は、開設時間中は、現場に常時、責任者を配置する。
- ・運営者は、「子どもの居場所」の安全・安心を高め、様々なリスクに備え、損害

5 地域の実情に応じた「子どもの居場所」づくりの推進支援

- ①地域の実情に応じた「子どもの居場所」づくりを、フードバンク・NPO法人等の民間団体・学校・PTA・地域住民・企業・農家・社会福祉協議会・行政等が連携・協力し、それぞれの立場において主体的に取り組み必要がある。
- その取組みを、県内各地に広げ、効果的で持続可能な運営とするため、県や市町村は地域のニーズに応じた支援策を講じる。
- ①「子どもの居場所」を運営したい人への支援
- 果は、家庭の事情で、放課後や休日等に一人で過ごす子どもたちに居場所を提供する子ども食堂、学習支援及び体験活動などの活動の充実を図るため、運営団体等への支援を行う。

- ・賠償保険や傷害保険等に加入する。
- ②衛生管理（食品衛生・アレルギー対策・感染症対策等）
- ・運営者は、手洗いやうがいを励行するなど、日常の衛生管理に努める。
- ・運営者は、調理した飲食物を提供する場合などには、事前に保健所に相談する。
- ・運営者は、施設設備や食事等の衛生管理を徹底し、食中毒の発生を防止する。
- ・運営者は、賞味期限や消費期限を遵守する。
- ・運営者は、飲食物を提供する場合には、食物アレルギーの有無について確認するなど、安全に配慮する。
- ③防災・防犯対策
- 責任者は、管轄の消防署や警察と連携を図り、事前に非常口、避難経路及び不審者情報等について確認するなど、子どもの安全確保に努める。
- ④個人情報保護
- 運営者は、子どもの利益に反しない限りにおいて、保護者や子どものプライバシーの保護、活動中に知り得た事柄の秘密保持に努める。
- ⑤場所の提供
- 社会福祉施設、学校の余裕教室、公民館、児童館、商店街の空き店舗など
- ⑥食材の提供
- 企業・商店街・スーパー・産直市・農協・漁協・フードバンクなど
- ⑦資金等の提供
- 企業・団体・個人など
- ⑧機会の提供
- 放課後児童クラブ・放課後子供教室・地域未来塾など子ども食堂との連携
- ユニバーサルカフェ・子ども食堂などでの学習支援など
- ③市町村における支援ネットワークの構築
- 市町村は、「子どもの居場所」づくりが身近な地域で実施されるよう、活動情報の一元化や公共施設における場の提供など、運営団体等の支援に努める。
- ①広域的な支援バンクの活用
- ②運営団体、学校、家庭、地域間の連絡調整
- ③安全管理体制の整備
- 福祉事務所・児童相談所・警察・保健所・社会福祉協議会等との連携
- ④周知・広報
- ・学校・地域住民への理解促進
- 子どもへの貧困対策にとどまらず、すべての子どもと家族の居場所であり、地域の人々が交流する場であることへの理解。
- ・市町村等の広報誌や自治会の回覧による活動予定の周知・協力依頼

わたしのいばしょ・みんなのいばしょ ～とくしま子どもの居場所づくり～

発行日	令和3年3月16日
発行	徳島県未来創生文化部 次世代育成・青少年課子ども未来応援室 社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会 国立大学法人鳴門教育大学（監修：木村 直子）
取材協力	ぎんざ和団和団（こどもmoおとなmo Wi-Wi 食堂） 徳島こども食堂ネットワーク いきいき安心移動こども食堂 特定非営利活動法人フードバンクとくしま Tsuda Machi Kitchen つだまちキッチン 社会福祉法人あさがお福祉会 特定非営利活動法人 子育て支援ネットワークとくしま 子育てほっとスペース・すきっぷ 鳴島児童館 上八万児童館 NARUTO 総合型スポーツクラブ 子育て応援隊！キッズステーションNARUTO
	一般社団法人 ひとみ学舎 外遊び場 さっちゃんち よこ 特定非営利活動法人はばたき 児童自立援助ホームゆめ 料理学習 つむぎ 友愛クラブ「ともしび」 子どもたちの居場所 ユニバーサルカフェ 「コミュニティはうす TSUDOII」 こどもっとからふる 子育て支援活動 社会福祉法人 共生会 ユニバーサルカフェ「きららカフェ」 なると子ども食堂「わくわくキッチン」 なるとにしてとてとて 「こどもふれあいひろば」

- 鳴門市健康福祉部福祉事務所 子どもいきいき課
- 社会福祉法人鳴門市社会福祉協議会
- 社会福祉法人東みよし町社会福祉協議会
- 東みよし町民生委員児童委員協議会
- 東みよし町ボランティア連絡協議会／گرانマ
- 東みよし町サロン連絡協議会／老人クラブ若手部
- 鳴門教育大学子ども未来応援プロジェクト

この冊子に掲載された内容は発行時のものです。
また、詳細な活動状況や利用料金・衛生管理等、「子どもの居場所」運営団体等に、直接お問い合わせください。



● 表紙絵（表表紙「ぼくのすきなせかい」・裏表紙）
KAZU.
平成12年生まれ。（現在20歳）
昔から絵を描いたり、物を作ったりするのが好きだった。18歳の時、当時通っていた放課後デイサービス「いつもここから」のスタッフと一緒に絵の販売をはじめた。今では、お店のDMデザインや、本の挿し絵の依頼もくるようになった。また、2020年12月に開催された「KAZU. ギャラリー展」は大盛況となった。